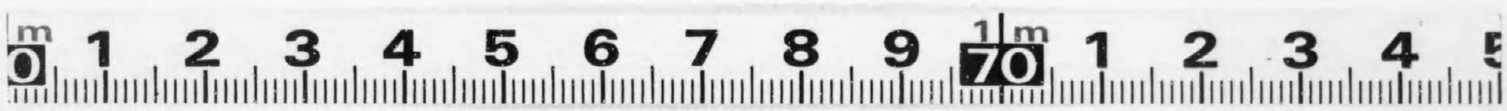
533
105



人生哲學研究會編

高僧傳

上卷

東京　越山堂版

大正
14. 10. 5
内交

533-105

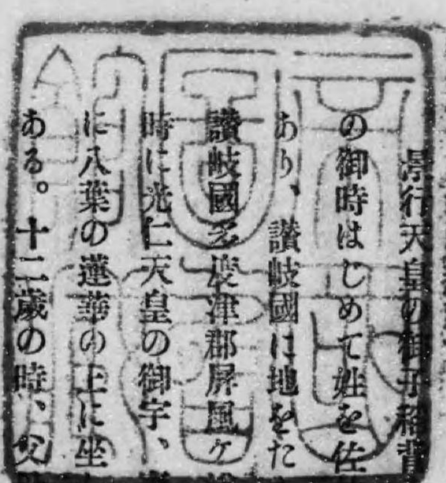
目次

一　日本　弘法大師……三
二　印度　龍樹菩薩……三五
三　日本　苅萱道心……五三
四　日本　聖徳太子……一〇三
五　支那　曇鸞大師……一一九
六　日本　役行者……一二九
七　日本　一休禪師……一七五
八　日本　祐天上人……二三七
九　西行法師……二八七

日本

弘法大師

（一）



淳仁天皇の御時、和銅二年、大彦命の孫、阿都津別命の男、豐島といふ人、孝德天皇の御時はじめて姓を佐伯と賜る。祖先は日本武尊に從つて東夷を鎮めて功勳があり、讃岐國に地をたまはつて住み、子孫相次で縣主となる。佐伯直の妻阿刀、讃岐國多度津郡屏風ヶ浦にて一子を產む、これ後に弘法大師となる人である。時に光仁天皇の御宇、寶龜五年の誕辰、名を多布度物といふ。五六歳のころ夢に八葉の蓮華の上に坐して諸佛と物語ると見る、されど父母に告げなかつたとある。十二歳の時、父母が相語つて、この子は昔の佛弟子か、夢に天竺の聖人が來つて懷中に入ると見て姙娠したから佛家に入れて沙門にしようかと、彼は幼少ながらこれを耳に挾んで深く悅ぶ。遊ぶにも泥で佛像を作り、草木をもつてお堂をまねて內に据ゑて禮拜する。地方政事を檢する勅使が讃岐國に下つた

時、彼が佛像をもつて遊び戯れるのを見て馬からおりて凡人に非ずとほめる、隣人等これを聞いて驚き、彼を神童と言ひはやす。外戚の叔父大足大夫が兩親に語つてこの子を佛弟子にするよりは大學に入れて經史をまなばせて身を立て名を上げせてはと言ふ。よつて伊豫親王學士たる大足大夫につけて學ばせる。彼は儒典をまなびて遂に延歴七年十五歳に家を去つて京洛に入り、十八歳の年に諸學者にまじはり鬢舍に遊んで毛詩傳尚書を讀み、岡田の博士について左氏春秋をまなぶ。

しかし彼の目的は他にあつた、石淵の僧正勤操を師として大虚空藏ならびに能滿虚空藏などの法を受ける。この法はむかし大安寺道慈律師が唐にわたつて諸宗をまなんだ時に善無畏三藏に逢つてその幽旨を傳へ受けて本朝に歸り、同寺の善儀大德にさづけて勤操和尚に傳へる。勤操この法の勝利を得て英傑のほまれ世に溢れたので彼は勤操に就てまなぶ氣になつた。彼は儒教によつて經史

をまなんだけれども常に佛教を好んで專ら遁世の心が深く、ひそかに思ふに自分が習つてゐる上古の儒典はたゞ現世のことだけで後世のことを說かぬ、こんなことはやめて眞の人生の福田を知らうものと考へた。彼は近士となつて名を無空と呼んだ。延暦十六年二十四歳の時に「三教指歸」を撰して儒教の益なきことをと述べる。朝市の榮華は念々に是をいとひ、巖藪の烟霞は日夕にこれをねがふ、輕肥流水を見ては即ち電幻のなげき忽におこり、支離懸鶉をみては則ち因果のあはれ日毎にふかし、目にふれて我をすゝむ誰か風をつながむ、爰に一多の親戚あり、我をしばるに五常の索をもつてし、我をことわるに忠孝にそむくといふを以てす、余おもはく物の心一にあらず、飛沈性ことなり、この故に聖者の人をかるに教網に三種あり、いはゆる釋李孔なり、淺深へだてありと雖も並にみな聖說なり、もし一つの網に入りなば何ぞ忠孝にそむかむ云々。

彼は遂に釁門をのがれて山林に入つて修行瞑想をつむ。石淵の僧正その苦行

をあはれんで彼を招きよせ、和泉國槇尾といふ寺で剃髪せしめて沙彌の十戒七十二の威儀をさづける。名を敎海を號して後にまた如空といふ。これは「三敎指歸」を撰した年よりも五年前のことである。延曆十四年四月に東大寺の戒壇院で唐僧泰信律師を傳戒の和尙として勝傳豐安などの十師を受け、羯磨を敎授として比丘の具足戒を受け、名を空海と改める。これより彼は人事をなげうちて世の煩ひを避け、常に幽閉を住家とし寂默を心として山より山に入り峯より峯に移つて修行に年月をさかねて諸國を行脚する。

土佐の室戸崎にとゞまつて求聞寺の法を觀じ、嚴冬深雪の寒き夜も藤の衣をきて精進の道をはげみ、盛夏苦熱の暑き日も穀漿をたつて懺悔の法をこらす。室戸崎は南海に面して高巖そばたつ、彼はこゝに草庵を結んで行ひすます。その歌に「法性のむろとし聞けどわが住めば有爲の浪風よせぬ日ぞなき」云々。その傳說に「明星彼の口中に散じ入つて佛力の奇異を現せり、則ちかの明星を

海中にむかひて吐き出したまひしにその光り水にしづみて今に至るまで闇夜にのぞむに餘輝なほ燦然たり」とあり、また「夜隱にのぞむ時に海中より毒龍出現し、異類の形あらはれて來て行法を妨げんとす、大師彼等を退けんがためにひそかに呪語を唱へて唾を吐き出したまふに四方にかゞやき散じて衆星の光を射るがごとくなりしかば毒龍異類ことごとく退散せり、その唾のふるゝ所ながく海濱の砂石にとゞまりて、夜光の珠のごとくして昏衢を照らすとなむ」とある。室戸崎の傍を三十有餘町へだつた所に勝地に宿願を果さんために一寺をたてゝ金剛定寺と名づける。廣緣きそひおこつて諸種に障難を結伽扶座の彼にむける、彼はそれと問答して「吾れこゝにあらんかぎりは汝この砌に望むべからず」と言つて大な楠木の洞に自像を作つておさめたので其後は永く魔類が競ふことがなかつたとあり、その楠木は猶ほ枝のび葉しげり、惡魔は同國波多の郡足擢の崎に追ひ込められたと傳へてある。

播摩國の行路のほとりに小さな庵があつて彼はそこに宿る時、一人の老婆が出て來て鐵鉢に飯を盛つて彼に供養して『私はもと行基菩薩のお弟子がまだ出家しない時の妻でありまして、遺言に入滅の後に某の月日に菩薩が來て汝の室に宿りたまふとあります、指を折つてかぞへると今日が丁度その日にあつたつてゐます、賤しい產れでもかうして菩薩にお逢ひ申すとはこんな有難いことはございませんので隨喜の心をこめてこの鉢をおあげいたします』と言ふ。彼はその庵を去る時に老婆がために天地合の三字を柱に書きつける、その字が深く染めついて削つてもなほ消えないと謂はれ、疲病にかゝつた者が水にすゝいで呑むとすつかりなほると傳へてある。伊豆國桂谷の修禪寺は彼の經行の勝地で修行の靈跡とされてゐるが、魔障の多かつたのを彼が虛空に向つて大船若の魔事品を書くと經の文字が現れて六書八體の點劃が亂れなかつたので魔障がなが く絕えて佛法がひろまり、また彼の自像が今も傳つてゐるさうである。彼が誕

生の地讃岐國の屏風浦に來つた時に山上に釋迦如來が現じたと見た彼は歡喜のあまりにその姿を寫しとつてその山にまつる、故に後世それを我拜師山または湧出の嶽となづけたといふ。

彼は諸宗の名德をたづねてひろく敎法を聽く。岩淵の僧正勤操は大安寺善儀大德の入室として久しく三論の奥儀をきはめてその譽れ一朝に秀でる、空海はこれに師事して幽旨三諦十玄の妙義に精練する。彼は佛前に誓願をなして曰く『われ佛法にしたがつて常に要法をもとむるに、三乘五乘十二部經も心神に疑ひありて未だ決すること能はず、たゞ願くは三世十萬の諸佛われに不二を示したまへ』と一心に祈請すれば夢の中に人あつて告げて曰く『こゝに經ます、大毗盧遮那經となづく、これ即ち汝がもとむる所なり、大和國高市郡久米の道場の東塔の下にあり』と。彼は大に悅んで其所にたづねて行き、件の經をもとめ得て一部の緘をといたが疑ひとゞこほるところがあつたので初めて唐に渡海

して法を求める志をおこす。この經が此處に納められた由來は中天竺の三藏善無畏がひそかに密機の熟生を試みてほゞ秘敎の行藏を知らうとして一葉の舟を浮べて萬里の浪をわたつて遙に唐を去つて日本に來り、高市郡王舍のほとりに庵をむすんだ、これが今の東塔院である。土民いまだ彼の法味を解し得ないため三藏はむなしく唐に歸る、此時に三粒の佛舍利を寶塔におさめて七軸の大日經を刹柱の下にこめて記文を殘して曰く「駄覩はこれ釋尊の遺身、經はまた遮那の全體なり、しかあれども小國片域大機いまだ熟せざるによりて此法を此地にとゞめ、まさに人をまち時を期するところなり、來葉に必ず弘法利生の菩薩來りて世にひろむべし』と記す。

（二）

桓武天皇の御宇、延曆二十三年五月、空海三十一歳にして留學の勅命を承つ

て遂に入唐の宿志をとげる。大使藤原賀能と共に肥前國松浦郡より第一の舟に乘りて玄海灘に出ると急に大風大雨に逢つて船もくつがへらうとするに乘組員みな生きた心地もない。空海は冥護によらなければ素願のとげがたいことを思つて一百八十七所の天神地祇に祈念し金剛般若の眞文を寫して神毎に法施したてまつるべき旨を誓約すると、風やみて浪しづまると謂はれてある。船は八月に福州長溪縣に入る。入朝の船は楊蘇州に着けば安全であるのが先例になつてゐるのに風のために七百里も離れたところに着く。この頃福州の刺吏柳光が病のために職を辭して新に觀察使が來る。大使藤原賀能が自ら書を作つて州の司に與ふ、州長は開き見てすぐ地に投げ捨てる、兩三度に及ぶも彼等少しも返報しない。それはこの船が楊蘇州に着かずに福州に來たのを怪しみ、また遣唐使のしるしもないところから只の漂流船と見て船を差押へて人をおろして海濱の砂上に据えて更に待遇しようとはしない。大使は『こんな虐待には我慢ならぬ

何か発れる方法はないか、御身は文筆の主である、どうか書をものしてくれ』と空海に言ふ。空海はそこで書をしたゝめて大使に代つて州長に與へる、州長はこれを見て初めてその狀を知つて慇懃に彼等を待遇する。十月に入つて空海はかさねて都に入らんことを望んで書を作つて州の觀察使に與へる、觀察使これを長安の都に奏す。三十九ケ月を經て州府の力使四人と資糧とを彼等に贈る。州長は誼しみをもつて懇に慰問して借屋十三烟を造つて大使空海の一行を住はす。其後五十八日を經て存問の勅使が來る、また仰客の使をもつて七珍の鞍をおいて大使空海の一行を迎へる。彼等は十二月下旬に長安城に入つて宣陽坊の官宅に宿る。

唐の貞元二十一年、本朝延暦二十四年の二月に大使藤原賀能は歸朝すれど空海と橘逸勢とは勅によつて留學する。空海は西明寺永忠和尚の故院に住し、城中をめぐつて諸寺に遊び、名德を訪ふて師依をもとめる。長安の青龍寺東塔院

の惠果和尚の事を傳へ聞いて西明寺の僧志明談勝など五六人と共に惠果和尚を訪ふ。和尚は大興善寺の不空三藏付法の上足眞空大祖大毘盧遮那如來七代の嫡嗣であり、德は時代に尊ばれ道は帝の師となり三朝の帝も灌頂を受け四衆もこれを仰いで密敎を學ぶ。彼は空海を見て悅んで『わしはお前が來ることを知つて待つてゐた、今日逢ふことがてきて結構々々、報命が盡きようとするのに法を付する人がない、必ず速に香花をそなへて灌頂の法を受けろ』と言ふ。空海よつて西明の本居に歸つて供具をいとなみ調へて東塔の精舍に來つて秘密の壇に入る。六月上旬に大悲胎藏の曼荼羅にのぞんで五部の智水に沐して三密の法印をさづかり梵字の儀軌を學び、諸尊の瑜伽を傳へる。七月上旬に更に金剛界の曼荼羅にのぞんで重ねて五智の瓶水に浴す。精誠の感があらはれるに及んで紫花瑞を吐いて曼荼くらゐを點ずること兩部臨壇の佳規の兆にたがふことがなかつたので惠果和尚も大に怪しんで感嘆する。遍照金剛の法號も此時にさづけ

られる。八月上旬にいたつて傳法阿闍梨位の灌頂を被る、此日五百の僧齋を設けてあまねく四衆な供養するに靑龍興善兩寺の僧衆等が齋筵にのぞんで悉く隨喜する。

惠果和尙の相弟子に內供奉十禪師の順曉阿闍梨といふ者あつてその弟子の僧珍賀が空海の受法を妨げようと思つて惠果和尙に『日本の座主がたとひ聖人であつても門徒ではない、諸敎を學ばせても密敎を授ける必要はない』と諫めること再三に及ぶ、しかるに珍賀その夜に神人が來てさまざまに折伏する夢を見たので惠果和尙の許に行つて五體を地に投げ三拜して『私は愚で御受法をさまたげましたら昨夜夢の中で責め苦を受けました、今後は心をひるがへして聖人に歸し奉ります、早く私の罪をおゆるしください』と陳謝する。日本南京の山階寺の修圓僧都は空海の名望を猜んで空海渡海の間はひそかに護法をつかはして空海が胎藏界の大法を受ける時を修圓に告げしめることにした。空海そのこ

とを知つて金剛界の法をさづかる時には盗法の者があるとて結界したので火焰が廓をめぐつて護法が近づくことできなかつたと傳へらる。惠果和尙は空海に『眞言秘藏經疎は隱密であつて、圖書をからなければ傳へることができない、書家をして絹素に寫させろ』と言ふ。そこで供奉李眞等の十餘人を呼んで胎藏金剛界の大曼荼羅と傳法阿闍梨の影像との十鋪を綵畫させ、また經生二十餘人をあつめて一百餘部の經論を書寫せしめ、供奉鑄金の博士揚忠信超吳などに鈴杵輪槾の道具十五事を新造させる。惠果和尙の入滅の期が近づいたので本尊道具など悉く空海の付屬となる。中に佛舍利八十粒、白縑の大曼荼羅、五寶の三昧耶金剛ならびに健陀穀子の袈裟など殊に祖師相傳のものである。惠果和尙は告げて曰く『私が幼少の時はじめて廣智三藏にまみへる、三藏は私をいつくしむこと子のごとく、ひそかに言ひたまふに汝は密藏の器であると、そこで兩部の大法秘密の印契を悉く學ぶことができた、他の弟子は一部の大法しか受けず一

尊の秘契しか得ず、兩部を兼ねるものはない、兵燹の恩を報じようと思ふにも昊天も極まりなし、いま此土の化緣も盡きること近く、兩部の大曼荼羅、一百餘部の金剛乘教、三藏轉付の物、供養の具など日本に歸つて海內に流布しろ、私はお前の來る前に命の絕えることを恐れてゐた、今はもう法のありとあらゆるものをお前に授け、經像の功もをはつた、早く歸國して國家にたてまつり天下に布敎して民蒼生の福を增せ』とねんごろに敎誡する。

惠果和尙は入滅の時に門人を集めて曰く『兩部の大法は如來の秘藏成佛の經路である、普く法界に流傳して有情を度脫することを願ふ、日本の沙門空海は兩部の壇儀印契、眞言漢梵たがはず、蘊奧を受けたること瓶をうつすがごとくこれ凡徒にあらず、三地の聖者である、內に大乘薩埵の心を具し、外に小國沙門の相を示す、日出づれば月かくれ、油つきれば燭火きゆるは物の常の理である、菩薩もとゞまらず、如來も滅じたまふた、まことに歸することをねがふ』

と、即ち唐の永貞元年十二月に絕命す。空海は石碑の文を書いて十二韻の銘をしるして惠果和尙の德行をあらはして廟塔の下に立てる。大唐の宮中に三間の壁があつて王羲之の筆跡がとめてあるが年たつにしたがつて破壞したので二間を修理することになつたけれど筆を下す人がない。唐帝から日本の和尙に書かせろと勅あつて空海は左右の手足に筆をとつて口にも筆を含んで一間には五所に五行を同時に書き、他の一間には墨をすりて盥に入れて壁の面に注ぎかけるに自然に樹といふ字となる、主上も臣下もみな驚嘆すと謂はれてある。帝は彼を五筆和尙となづけて此國にとゞまつて師となることをすゝめる。彼は答へて『身を忘れ命をかろくして遠く蒼溟をわたることは佛法を傳へて邊國を利せんためであります、たとひ帝の師たること得るとも私の本懷とするところではありません』と申す。帝は『汝の言ふところ誠に理にあたる、朕は汝をとゞむるに非ず、朕の年すでに半ば過ぐ、願くば一期の後は佛惠を期せん』とて信仰を

表して來緣を契つて菩提子の念珠をたまふ。

空海が城中を遊びめぐつてゐる時に、河のほとりに蓬髪みだれて肩のあたりにかゝり藤の衣は破れて膝をあらはす童子一人すゝみ出て『和尚は日本の五筆上人か』と問ふ。空海『さうだ』童子『そんならこの川の水に字を書いて御覽』と空海は即ち清水を讃する詩を書く、文點みだれずして水と共に流れ下る。童子『おれも書いて見る』と水の上に龍字を書く、文字は浮びあらはれてそのまま流れ去る、しかし右の小點を打たない。空海はそれを見て『なぜ點を落したか』と問ふ、童子『わすれた』と言つて點を付ける、その時に響あつて光を放ち眞龍と化して空にのぼる、童子『私は文珠だよ』と言つて消え失せたと傳へらる。

（三）

大同元年八月、空海は日本國使高階眞人と共に歸朝す、平城天皇の朝にあたる。暫く九州に逗留して觀音寺に住す。入唐の時に海上衞護のため宇佐八幡宮と有勢の明神とに祈請したので歸朝するに及んで禮參す。翌二年に入京して大和國久米の雁塔に於て善無畏の疏について大日經の文を講ず。柏原天皇が延曆年中に長岡の故京を移して平安の新宮を建てらる。其後嵯峨天皇が登極の始めに周廊殿寮の諸門華構は既にとゝのひをれど名額がまだ備つてないので、東西の門額は天皇みづから宸筆をくだされ、北方は橘逸勢が書く、空海も勅によつてその南門に揷毫し、また應天門の額をも書かせらる。天德年中に小野道風が空海の筆勢を難じて『朱雀門に非ず、米雀門である』と嘲つた。その夜夢に異人が弘法大師の使だと稱して首を踏みつけたとある。

東大寺は聖武帝御願の精舍で良辨僧正の草創にかゝる梵閣である。嵯峨帝の弘仁の頃となつて大さ四五寸の蜂群がこゝに現れて人を刺す、刺された者は命

を失ふ、法をまもる僧徒は命を輕しとて猶ほ室にとまるも身を惜しむ凡僧は跡を隱して寺を去る、ために學業やうやく棄れて法命まさに絶へようとする。宸襟やすらかならず勅あつて空海をして住はせたまふ。彼が住むやうになつてからは蜂も姿を消し、僧侶等も寺に歸り來つて學業も再びおこつて京畿の學徒が大に集る。弘仁元年の冬のころ表をたてまつりて月の一日より山門を出でず秘法を修練して皇朝の福祚を祈るべき旨を申し奉る、その詞に『空海幸に先帝の造雨に沐し、海西にあそびてたまたま灌頂の道場に入つて一百餘部の金剛乘の法門をさづかることを得たり、その經は即ち佛の心肝、國の靈寶なり、持來るところの經法の中に仁王經、守護國界主經、佛母明王經等の念誦法門あり、佛國王のために殊にこの經をときたまふ、七難を摧滅し、四時を調和す、國をまもり家をまもり、己をやすくし他をやすくするはこの道の秘妙なり、空海師授を得といへども未だ練行にあたはず、伏して望むらくは國家の御ために諸の弟

子をひきゐて高雄の山門に於て來月一日より起首して法力の成就にいたるまで且は教へ且は修してその中門に於て住所を出でず餘の妨げを被らざらむ、伏して乞ふ昊天疑誠の心を鑒察したまへ』云々。其後さまざま御願をつとめ行ひて密教の道場となす。元は神願寺と名づけたのを後に改めて神護國祚眞寺と號する。

欽明天皇の御代、佛教はじめて我朝に傳はり聖德太子の御時、法門さかんに海内にひろまる、七宗の行果は人これを學ぶと雖も兩部の灌頂は世に未だ知られぬところ空海にいたつて漸くひろまる。天子は尊びて稽首し、嵯峨淳和兩朝の皇后うやまひて灌頂す。弘海二年の冬、天皇みことのりして空海を乙訓寺の別當に補せらるによつて彼は高雄を去つて乙訓寺に移り住む。翌年十月ごろ傳教大師が頭陀のついでに乙訓寺に來宿して大法儀軌をうけんために灌頂の大道をひらくことを談ず。空海これに答へて『私の生年四十、期命つきるだらう、

念佛のため高雄の禪居に歸り住まうと思ふから其處へおいでください』といふ。空海かくて乙訓寺の別當を辭して高雄の舊居に歸るに及んで傳敎大師はそこに行つて志をとげて金剛界の灌頂を修す。播摩大椽の和氣眞綱、大學大允の和氣仲世、美濃種人なども同じく密壇にのぞんで智水に浴す。後にまた空海は傳敎大師のために胎藏の灌頂をひらく。此時に大僧二十二人、沙彌三十七人、近士四十一人、童子四十五人あはせて緇素百四十五人が誓水に浴して惠澤にうるほふ。兩部都會の灌頂このときから始まる。弘仁十三年、平城太上皇は仙蹕をめぐらして嚫嚫を施して佛戒を受けて灌頂を授かりたまひ、翌年は玉體を屈して五智の瓶水に浴して萬乘の寶位をのがれて三密の法門を修します。それよりこのかた聖帝皇后が相續いて彼を師依として群臣百寮も競つて稽首す。藤原左大臣不比等が興福寺を建立して氏等としたれど其後やうやく年移つて藤原氏の勢おとろへて他氏に移らうとするを見て冬嗣は空海と師檀の契りあさからぬにより、藤原氏の繁榮を祈らうため弘仁四年に興福寺内の勝處をえらんで八角の圓堂を建て不空羂索の像を据ゑて修行持念す、今の南圓堂がそれである。空海は鎭壇を行ずる時に壇を築く人夫の中に書相の老翁があつて『ふだらくの南の岸に堂をたて今ぞ榮へん北の藤波』と詠ず、これ春日大明神と傳へらる。冬嗣は歸佛の志いよいよ深く信法の思ひますます懇となり、陶化坊の内に甲勝の地景をえらんで大厦の構をいたして一の黌舍をたてゝ券契を投げて長く大空海におくる。

和泉國槇尾寺は空海の出家の當時つねに宿りて修練せしところ、水とぼしくて住人これを憂ふ。彼ひそかに平地にむかつて神咒を誦じ密印をむすんで加持するに清泉わき出て流れ、この水を呑む人は精神爽快となるゆえ智惠水と名づく。弘仁九年の春、疫病流行して國中斃死する者が多く、帝の宸襟やすからず攘癘のために金字の般若經を寫されて空海を請じて開題の唱導としたまふ。よつ

て空海は秘鍵一卷を製作して心經五分の幽旨を述べるに未だ結願に及ばぬに蘇生の輩あつて夜闇たちまちに變じて日光のかゞやくごとしと謂はる。天長四年の夏のころ旱魃のために衆民かなしむ、皇帝みことのりあつて畿内七道に奉幣して月の一日から三日のあひだ大極清涼の兩殿に於て百僧を招いで大般若經を講讀して雨を祈らしめ、空海をえらんで唱導とするに雨こゝにあまねく降つて地をうるほす。その賞によつて天賞四年に大僧都に轉任されるや、惡瘡が肌に生じて吉相の現ぜぬを見てその官職を辭すれども皇帝しばしば慰勞あつてそれを許さず。

空海が歸朝の時に海路の風波あげしく天神地祇の威護を仰ぎてさまざまの立願あり、弘仁七年の夏にその素願をとげんとして相應の勝地をゑらんで修禪の梵字を建てゝ諸の弟子をして法によつて修行せしめなば諸天の威を增して善神は力を得て國をまもり生を利する基とならうと考へて少年の頃に山林を涉獵し

て知る吉野山より南に去ること一日、更に西に向つて兩日の程を經て平原の幽地があつて紀伊國伊都郡の南にあたる所に地を定め、表を奉つてその山を申し受けて入定の所となす、今の高野山がそれである。その表に曰く「山高くしては則ち雲雨物をうるほし、水積りては則ち魚龍產化す、このゆえに耆闍の峻嶺に能仁の跡休せず、孔岸の奇峯に觀世の蹤相續けり、その所由を尋ぬるに地勢おのづから然なり、又は臺嶺の五寺に禪客肩をならべ、天山の一院の定侶袂をつらね、これ則ち國の寶、民の深なり、伏して惟みれば我朝歷代の皇帝心を佛法にとゞめて、金刹銀臺櫛のごとくに朝野に比び、談義の龍象寺毎に村をなせり、法の興隆こゝにして足れり、但し憾むらくは高山深嶺に四禪の客とぼしく幽藪窮巖に入定の賓まれなり、誠にこれ禪敎未だ傳はらず、住處相應せざるが致すところなり、いま禪經の說に准ずるに深山の平地最も修禪によろし、いま思はく上は國家のため下は諸々の修行者のために荒藪を芟蕪して聊か修禪の一

院を建立せむ、法の興廢は悉く天心にかゝり、若くは大、若くは小、敢て自由ならず、望み請ふらくは彼空地を賜ることを蒙りて早く少願を遂げむ、しからば則ち四時に勤念して雨露の恩を答へたてまつらん」云々。天許とゞこほりなく官裁の詔旨を下さる。空海すなはち泰範、實惠等をして彼山にむかはしめ荒藪を苅り拂つて一兩の草庵をむすばせて高雄の舊居を避けて南山の深嶺に移り入る。彼が移り住むに至つて地主山王が形をあらはして『わが性、山水に馴れて人事に疎し、またこれ浮雲のたぐひ、吾はこの山の主である、幸に菩薩に逢つてこの領地を獻ずる、吾がために威驗を增したまへ』と申すとか、これ丹生津比女の一の御子高野大明神が誓約したのだといふ。また山路のほとりに女神丹生津姫命のやしろがその周圍十町ばかりの澤の傍にある、空海がそこに宿る時に明神が巫祝に託して『妾、神道にありて威福をのぞむこと久し、まさにいま菩薩この山に到れる、妾が幸なり、弟子昔人たりし時に、食國皇命が家地

萬許町をたまはれり、南は南海をかぎり北は大和河をかぎり東は大和國をつかひて西は應神山の谷を境へり、願くばこれを奉りて永久に仰信の情をあらはさん』と言ふ。空海すなはち明神に法施するため天野のほとりに曼荼羅院を草創し、後に改めて奥の山に移す。この丹生明神は伊佐奈岐尊の御子として十二の御子を率ひて一百二十所の靈神を眷屬とすと。

空海は官符を得て伽藍を草創するため七日七夜の大結界の法を行じ、東西南北、四維上下七里の内にながく障りをなす惡鬼神を退けて善心ありて佛法の中に利益あるべき物をとゞむ。また樹木を切り拂ふ時、唐朝を出發する際に投げた三鈷が松の梢にかゝつてゐるを見たと傳へらる。地を開き平げる時に猶ほ長さ五尺、廣さ一寸八分の寶劒を石龕の中から堀出す。これは古仙の遊處、先佛の舊基であることがわかる。勅によつて叡覽に備ふることにしたが、後に聊か祟りをなすことがあつたので卜占を行へばこの劍の業かと見えたので銅の筒に

入れて元の所に返し置く。空海が住して後は寺院堂塔や坊舍が次第にその數を增す。官に進じて御願の庭と稱して金剛峯寺と名付ける。先づ三間四面の金堂一宇を造つて一丈六尺の阿闍佛、八尺五寸の四菩薩を安置す。天長の聖主より勅ありて大和國弘福寺をたまはる、空海が京洛と高野との間を通ふための旅宿にあてたまふためである。

（四）

東寺は桓武天皇が平安遷都の初め國家を鎭護するため羅生門の左右にあたつて東西兩寺を建てられた時のものである。弘仁十四年、忠仁公が勅使としてこの寺を永く空海にたまひて眞言密敎の庭として相傳の所となす。空海すなはち請來一百餘部の金剛乘の法文、三國相承の佛像、佛舍利、阿闍梨附屬の犍陀穀子の袈裟道具など悉く大經藏におさめて宗の長者たる人に相續して檢校せしめ

る。十月空海は五十口の定額僧を置き、宗の經律論を弘通し、他宗異類のまじはりを戒しめ、密敎根本の場とすべき旨の官符を受く。或日紀州の化人が稻を荷つて兩婦と二子とを伴ひ東寺の南門に來る、空海はこれを見て悅び迎へ、八條二階の柴守が宅に宿さしめ、帝都の巽(東南)にあたりて杣山を點じて利生の勝地とさだめて七ケ日夜の法によつて鎭壇して彼を移す、これ今の伏見稻荷の社である。

大和國室生山は畿內第一の淨場とて空海は靑龍阿闍梨に附屬したところの秘本尊佛をこの峰に籠めて渡海同行の弟子堅惠法師をこゝに住せしめる。後に佛隆寺が建立さる。深草の御宇、承和の初め空海は勅喚によつて大內中務省において正月後七日の秘法を修したる後に表を奉つて永代の規式を奏したので、勅解由目の廳を改めて眞言修法院を建てられて、曼荼の尊像を安じ秘密の壇場を開く。承和元年十一月諸の弟子に告げて曰く『私は世を去ること明年三月中と

思ふ、金剛峰寺の草創が功いまだ半ばに入定することになる、實惠禪師は國王の師として德天下に滿つ、眞如禪師は他境の意あり、眞雅眞濟は別人の契約を受く、眞紹禪師は別所建立の思ひあり、眞然禪師ひとり師蹤をつぐ念があるこの師をもつて此山を附屬する、しかし力あつからず、實惠禪師の德を加へて建立させよ』云々。

天長九年十一月よりふかく穀味をきらつて專ら坐禪を好む。彼曰く『もろもろの弟子あきらかに聞け、汝等つゝしんで敎法をまもれ、吾れ入滅すること來二十一日の寅の刻である、諸弟子よ、悲しみ泣いてはならぬ、吾れたとひ世を去つても兩部の諸尊を信敬すれば自然に吾に代つて眷顧したまふ、吾れ初めは思つた、一百歲世に住して敎法をまもらうと、しかれどもなむだちを賴みて急いで永く即世に擬する、門徒數千萬あるといふとも吾が後生の弟子となる祖師、わが顏を見ぬとも心あらん者は必ずわが名號を聞いて恩德をまもりついで龍華

の三庭に到らしめるはかりごとである、吾が閉眼の後は必ずまさに都卒陁天に往生して彌勒慈尊の御前に侍るであらう、五十六億餘の後必慈尊の御もとに下生して吾が先跡を訪ふ、又かつ〳〵未だくだらぬ間も彼雲管より見て信否を察せよ、此時つとめある者はたすけを得、不信の者に不幸であらう』云々。空海の入定期がちかくなつて弟子眞如觀王が末世後生の戀慕の心をやすめんがため影像を寫しとゞめようと密かに描くを空海がそれを知つて開眼は私がしようと筆をとつて眼睛を入れる。高野山の御影堂に安置せられて今に傳はる。かくて承和二年三月二十一日の寅の刻に空海は宴坐して秘印をむすび、恬然として禪定に入る、其間弟子等は彌勒の寶號をとなへて空海の眼を閉ぢるをもつて入定の期とす。時に六十二歲である。生身のごとしといふ。すなはち庵室より奧院に移して世間の法にならつて七日の齋忌をおこなふ、七日毎に弟子達まゐつて拜むに顏色おとろへず鬢髮ながく伸びてある。後に石壇をたゝみて僅に人の出

入するほどにして其口に石の五輪の塔をたてゝ種々の梵本の陀羅尼を收め、また更に寶塔を立てゝ佛舍利を安置す。二十五日に公家より勅あつて內舍人をつかはされて空海の修儀を行はしめたまふ。朝を廢すること三日、太上天皇（嵯峨天皇）宸筆を染めて弔書を下す。

印度

龍樹菩薩

(三)

南天竺の憍薩羅國の梵志の種、大富貴の家に產れて名を龍樹と稱す、梵志とは波羅門の別れである。母が樹の下で平產するところからその名ありといふ。いまだ乳を呑み食をくゝめられるうちから諸梵志の四章陀典(外道の書)を人が讀むのを聞いて三十二字づゝある偈文四萬頌を悉くそらんじ覺えてその萬理を心にさとると傳ふも、そはあまり誇張の言であらう。二十歲の頃にいたつて五天竺をめぐつて天文、地理、易學および諸の道術など、殘るところなく學び得て、廣き天竺に誰あつて彼につゞく者なく、その名四方に響く。彼に朋友三人あつて頗る豪傑、或時會合して相語つて曰く、既に天下の義理に於て神明をひらき、幽旨を悟るべきもの總てこれを盡す、この上は何をもつて樂しみとしようか、身に歡樂をきはめるほかになし、人情をほしいまゝにして色慾をむさぼ

ることそ一生の樂しみであらう、さりながら吾等は梵志の徒である、一國の王公でなければ思ひのまゝに榮華をきはめ婬樂に耽けることは難い、所詮この身を隱すの術をまなんで王宮に忍び込みて自由に出入して婬樂をむさぼらうと、四人相連れだつてその術家に行く。隱身の術とは俗に忍術のことである。術師たる人つく〴〵と思ふやう、この四人はいま天下に於て並びなき秀才であつて名を世にほしいまゝにして世人を塵芥のごとくに見る、いかでが吾家に腰をかゞめて來るべき連中にあらず、この梵志等は才明を世に絶すと雖もいまだ吾術を知らぬから斯の如く屈して來たのである、吾れもし速に法を授ければ必ず吾れを棄てゝ去つてまた來ることはない、先づ暫くその藥ばかりを與へて法を傳へることは延ばさう、されば藥の盡きるとき必ずまた來るに違ひない、かくて長く吾れを師として尊敬するだらう、よし〳〵と心を決して青色の丸藥を各々一粒づゝを與へて敎へて言ふには『おんみらよ、この丸藥をもつて人のゐない極

めて靜かところに引籠つて水で摺りつぶして兩眼に塗りたまへ、しかる時は如何なる人中に出ても姿の見えることがない』と懇に敎へる。四人は大に悅んで厚くお禮を述べて藥を持ち歸つて王城に忍び入ることを相談す。龍樹はその丸藥を器に入れて水にて摺りつぶし、その香氣を嗅いで暫く考へ、遂にその藥が七十種の藥をもつて調合したものであることを知つた。こゝに於て再び術師のもとに到つてその由を語るに、術師は大に驚嘆して問ふて曰く『御身はどうしてこの藥の調合を知つたか』と。龍樹答へて『藥にはそれ〴〵の香氣がある、なんでもすぐわかる』といふ、術師はまつたく嘆伏して『一二種の藥たりともその味ひ分量まで呑みわける者はない、そんな人は聞いたこともないのにいま相逢ふは吾がいやしき術なんぞ惜しむに足らぬ、たとへ隱すとも何の詮なきことである』とてその藥の製法萬端をつぶさに授けたといふ。

龍樹は隱身の術を傳はりて三人の朋友にもくわしく授け諸共に王城に入つて

女官の室に忍び込む。もとよりその姿が見えないから數多の禁門に於て咎められることなく心にまかせて后宮女の各房に到つて宮闈の美人を悉く犯して色慾をほしいまゝにす。しかるに百餘日の後に女宮の局に於て懷妊の女おびたゝしく、どうした譯かを知らず、女宮の面々はひたすら愧ぢおそれて包み隱すによしなく種々評議の上、遂に止むを得ずその旨を帝王に奏したてまつるに帝は大に驚かせたまひて、これ何んの不祥にして斯の如き怪事をなすものあるかと、臣下を召して何者の所爲なるかを穿議あり、一人の老臣すゝみ出て申上ぐ『凡そ斯のごとき奇怪には二種ある、一に魑魅魍魎、狐狸の類、また一には方術といふ身を隱すの術をもつて忍入ることである、これを調べるには諸門の內にこまかな砂を布きて嚴しく監視人をもつて見まもるならば、もし鬼類であれば足跡なく、隱身狐狸の業であれば必ず足跡あらはれる、それが果して鬼類の所爲なら術をもつて滅し、人間の所爲なら兵士をもつて退治す、叡慮をなやませた

まふことなし』と奏す。帝をはじめ數多の群臣じつに道理とて魑魅降伏の術者を招き、また力士數百人を備へて諸門の內に白砂を敷きて法を構へて待つほどに、案にたがはず四人の足跡が庭上にあらはる。すは曲者ござんなれと合圖をもつて四方の門を堅めしめて勇士數多を宮中に入れて劍をふるつて的を定めず上下左右、縱橫無盡に殿中のくまぐますみぐまを空を斬つて振りまはさしめば何かはもつてたまるべき、さしもに隱身の術を得たる彼等も、隙間もなく斬り立てられて即時に三人は斬殺されて忽ち形をあらはす。龍樹はそのとき危かつたが元より智惠すぐれてある彼れ帝王の側に寄り添つて身をちゞめて息をとめて坐してゐる、帝王のほとり七尺四方は劍を振ることができぬ、これによつて劍難をまぬかれて辛くも命をたすかる。此時はじめてつくづく思ふやう、まことに色慾はこれ苦の本である、好色はこれ禍の根である、德をやぶり身を危くすることみな是から起る、なすべきことに非ずと悟る。こゝに於て彼は一心に誓

をたてゝ曰く、吾れもし今日厄難を免かることを得ば出家となつて佛法を修すべしと決心する、かくて難をまぬかれて宮中を忍び出ることができた。

（二）

釋迦が摩羅那山に於て說法する時、大惠菩薩が難じて一百の問をたてる、釋迦一々それに答へる、それを記したものを咒伽經（しゅがきょう）といふ。其中に未來記あつて『南天竺國の中に大德の比丘あらん、龍樹菩薩と名づくべし、よく有無の見を破し、人のために吾が乘の大乘無上法を說き、歡喜地に住し、安樂國に往生せしめん』と記さる。彼は山に入つて一つの佛塔に詣でゝ出家受戒して九十日の間に三藏（經律論）を讀みつくし、大小乘の深義を究める。なほそのほかに別の經あるかと十方をたづねて得るところなし。こゝに於て遂に雪山に登つて山中に塔を發見し、塔の中にをる老比企尼にまみへて法をたづね、摩訶衍（まかえん）經典を與

へられて讀み、その實義を知つたが未だ通利を得ず。故に諸國をめぐつてひたすら餘經を求めて天竺中あまねく探し歩くも學ぶべき經がなく、外道も論師も沙門も義宗に當つてことごとく彼等を摧伏する。時に外道の一弟子『師は一切の知人である、いま既に佛弟子となる、しかるにその道を承けて足らぬと思はぬか、たゞ一事足らなくとも一切の智ではない』と問ふ、龍樹それに答へる言葉なく、殆ど心が屈して忽ち那慢の念をおこしてつら〳〵思ふに世界中の法の數は甚だ多い、もとより佛經は妙なりとも利をもつてこれを推し量るにいまだ盡されてゐないところがある、その未だ盡されてゐないところを吾は推し述べてもつて後學の者をして悟らせよう、理に於てたがはなければ事に於て誤ることなし、されば何んの咎めがあらうと心を決す

かくて龍樹は新に法を立て、先師なる者を見たてゝそれを置き、戒を敎へ衣服を改め造つて佛法にならつて聊か異なるものとして衆人に受學せしめようと

考へた。そこで日を選み時を選んで諸弟子に新に戒を授けて新しい衣を着せしめ、龍樹一人は靜なところの清淨の中に在る。そのとき菩薩位に任ぜられた大龍神が出現してこの狀態を見てしば〳〵惜しんでこれを憐れみ、直に龍樹を伴つて海中に入つて龍宮城に到り、宮殿に於て七寶の倉を開いて七寶の箱を取出し、もろ〳〵の方等深奥の經典、無量の妙法をもつて彼に授く。龍樹これを受けて讀誦すること九十日、その經卷の數すこぶる多し。されど經說の心の深きを悟つて實利を會得しても佛法のありがたきを未だ眞實に了解できない。龍神がそれを察して問ふて『おんみの見るところの經はそれで一切かどうか』と問ふ、龍樹『諸函中の經卷はなはだ多く無量にして盡すことができない、いま讀んだだけでも世界に滿つほどである』と答へる。龍神曰く『いま御身が見る經のごときはこの宮中の諸處に藏してあるものゝ一小部分でしかない、まだ〳〵秘藏の諸經その數かぞへられぬほどだ、お目にかけよう』とて無量の經藏を開

いて見せる。これまで見たところの經に百千萬倍してゐるので龍樹は感嘆これを久しうして實に佛經の宏大言語に絶すと。こゝに於て諸宗の一相を得て深く無生を悟つて二忍具足することを得。よつて龍神は彼が佛道を成就したのを見て龍宮城からともなひ出して娑婆世界に送り歸すと傳ふ。

彼は南天竺の諸王國を巡覽して邪道を信用する沙門釋子一人もなく、國人遠近みなその王道に化するを見る。彼れつく〴〵思ふに、樹はその本を伐らなければ傾かぬ、人主を化しなければ道も行はれぬと。時にその國の王家が金錢を出して人を雇つて行列の人夫とする、龍樹はこれ幸ひとその募集に應じて人夫の將となつて戟を携へて前驅に列するに、その行列の隊伍をとゝのへ組々の次第を正して進退遲速を指揮すること嚴しくなくとも令おこなはれ、法を用ひなくとも衆卒がよく從ふことまことに奇である。國王はこれを見て甚だ悅んで『この男は如何なるものか』と問ふ、從臣こたへて『この者は募集に應じて勤める

のですが、扶持も食せず錢もとりません、しかるに恭しく謹んで勤めること御覽のとほりでございます、何を求め何を欲するつもりかわかりません』と申上ぐ。王は彼を近く召して『汝は誰であるか』と問ふ、龍樹『私はこれ一切智の人であります』と答へる。王は大に驚いて更に問ふて『一切智の人は古代に一度あつていま有ることを聞かぬ、汝みづから智人なりと稱すること何をもつてこれを證するか』といふ。答へて曰く『智を知らうと思ひたまふならば何にまれ問ひたまへ』と。王みづから思へらく、吾は智主大論の議主である、問ふて彼を屈伏することは安いけれども別に名譽でもない、しかし問はなければ彼は誇るだらう、どうしたものかと暫く思案の後に己むを得ずして『天いま何をかなす』と問ふ、龍樹『たゞいま阿修羅と戰ふ』と答ふ。王は久しく言葉なく、その答を非とするにもこれを證することができず、その答を是とするにもこの事を明らむやうもない、故に王はいまだ言を出し兼ねてゐる間に龍樹また曰く

『これ虛論をもつて勝を求めるの談ではない、帝よ、暫く待たせたまへ、やがてその驗がありませう』と、言葉のおはるや、忽ち空中に干戈兵器あつて相續いで地に落つ。王の曰く『干戈劒戟はこれ軍器であると云つても、汝は何の故に天と阿修羅と戰ふことを知るか』と、龍樹『これを虛言と思ひたまふならば實事をお目にかけませう』と言ふ。折りから阿修羅の手足指および耳鼻など空から落つ、猶ほ王と臣民、婆羅門をして空中に天と阿修羅との兩陣が相對峙するところを見せしめる。王すなはち稽首して龍樹を敬つてその法化に伏す。

殿上には萬の婆羅門あつて各々束髮を切りすてゝ成就戒を彼より受けて弟子となる。彼は南天竺に於て大に佛法をひろめて外道の有無の邪見を摧破して廣く摩訶衍(大乘)を明にす。これ則ち大上無上の彌陀の大願にして、自行化他を施したまふとある。かく彼は優婆提舍の十萬偈を作り、また莊嚴佛道論の五千偈、大慈方便論の五千偈、中論五百偈を作つて大乘の敎を大に天竺内に行ひ、

また無畏論の十萬偈を作る。彼は十萬二十萬の偈を說いてあまねく佛法をひろめて殊に國王が歸依するによつて國中の萬民は風に草木のなびくがごとく佛法を信ずるにいたる。ときに一人の婆羅門あつてよく咒術をもつて種々の奇瑞をあらはす、龍樹の盛名を大に妬んでその術を行つて龍樹を一時にとりひしがんと思つて天竺國王にねがふやう『龍樹と術を爭つてひろめるところの法の勝劣をきはめたく存じます』と申す。王の曰く『汝がごとき大愚痴の身としていかでか龍樹の相手となれるものか、龍樹の智惠の明かなことは日月と光を爭ふやうだ、汝これを崇敬して必ず敵してはならぬ』と。婆羅門は折返して『恐れながら大王は御歸依あらせられるからその善惡を知らしめさぬのです、王は智人ではありませんか、何ぞ理をもつてこれを現はさないで勝劣のわかるものですか、ひとへに術をくらべんことをゆるしたまへ』といふ。王も今は制しかねて然らばと許し、即時に龍樹を召してこの由を告ぐ。日をえらんで王は龍樹と共

に政德殿に出御あつて待ち受ける。波羅門は後から來つてこの有樣を見るより即ち殿前に於て口に咒文を唱へれば忽ち大なる池があらはる、清淨の水わき上り、其中に千葉の蓮華が生ず。婆羅門すかさずその蓮華の上に打乘つて大音をあげて『龍樹いま世に誇るといへども汝は地上にあつて畜生と異ならず、吾はかく清淨の蓮華の上に座す、されば吾は大德智人ではないか、さあ論義いたさう』と稱す。そのとき龍樹は少しも騷がず暫く咒術を行へば忽ち六牙の白象が現れて、しんづ〳〵と池の中に入つて婆羅門の乘つてゐる廣大の蓮華の軸を鼻をもつてくる〳〵と卷いて引拔いて虛空に投上げて大地にどつと落せば婆羅門は腰骨を打碎かれて大に苦しみもだへて頭をかゝへてあやまり入つて龍樹に歸命して『私は身のほどを知らず、大師を辱しめようとしたのは愚かな、ねがはくは私を憐れんで愚蒙をひらかせたまへ』と言ふ。龍樹は彼をあはれんで弟子に加へる。こゝに於て國中の外道の徒ことごとく龍樹を信じて上は國王より

下は庶民にいたるまで彼を仰ぎ尊まぬ者はなく、遂に大乘無上法をひろめて衆生を濟度する。

小乘を信ずる一人の法師あつて常に龍樹の大乘を怒る。龍樹まさに此世を去らうとする時にこの法師に問ふて『汝は久しく吾れの世にあるを願ふか』といふ、答へて『まつたく願はしくない』といふ。龍樹はこれを聞いて退き閑室に入つて扉を閉づ、日を經るも出ることがない。弟子これを奇異に思つて戸を破つて中を見るにその姿はどこにも見えず、行方もわからず、故に南天竺の諸國はそのために廟堂を建てゝ敬奉すること佛のごとくであつたと傳ふ。說に曰く、大乘佛敎は釋迦の所說でなくて、それはこの龍樹の初めて說いたものだとのこと。摩訶摩耶經と涅槃經と佛祖統記などによれば釋迦の滅後七百年の後とあり、また中論の說によれば五百三十年或は九百年後とあり、法苑珠林六十六卷の玄奘三藏傳によれば佛滅後三百年に出世ましまして七百年の長生をたもつと

ある。龍樹は諸宗の高祖であつて天台、眞言、禪宗、華嚴、三論、法相、淨土眞宗などに至るまでみな彼を祖師とする。

日本

菊萱道心

（一）

崇德天皇の御代に筑前國那珂郡の博多守護職、加藤兵衛尉藤原の繁昌といふ人あり、弓馬の達人で九州から關東に至るまでその武名は隱れなく、鎭西の加藤とて鬼神のやうに稱さる。元來博多は唐船が出入する港であるから異賊の襲來を防ぐために武勇すぐれた士をえらんで守らせるのであつて繁昌はその適任者といふので年月を重ねて此處に置かる。九州中國にかけて繁華第一の所で加藤兵衛はこの地に住んでから民間の產業も豐かとなつたので香椎宮の神主が一首の歌「わが國に賑ふ民のかまど山けむりもあつき君がめぐみに」と詠じてその德をほめる。かくのごとき次第で國民は彼の德になづいて家も富み榮えたが已に四十有餘歲になつてもまだ嗣子がないのを憂ひて香椎宮に詣でゝ丹誠をこらして祈りもとめる。一七日の參籠に滿願の朝となつて白衣の神人が枕に立ち

『吾は當社の御使である、汝は領内をはじめとして國中の兇徒を平げて民安く浪しづかなる、海山の幸の多かるは必定、祈らずともいかで守りたまはぬことあるべからず、箱崎の松原の西の橋ぎわ博多の東、石堂口の川の邊に行け、そこに溫潤な玉のごとき石がある、その石を持ち歸つて妻女に與へよ、必ず男子を生ずるであらう』と。靈夢を感じた彼は直に石堂川口に走り行つてこゝかしこと尋ねたが更に靈夢に言はれたやうな石がない。猶ほ歩きまはるうちに石の地藏一體をみとめたので近づいて見れば左の手に如意寶珠があるべきに鷄卵大の圓い石が載せられてある、手に觸れて見れば溫い、それは人肌の溫みで、光輝燦然としてゐる。彼は大に感嘆してそれを取つて拜禮し、これだ〳〵と家に急ぎ持歸り、妻女にこのことを告げて抱かしめる。妻はほどもなく懷胎して翌年正月二十四日に男子が出生したので例の靈石にちなんで幼名を石堂丸と名づける。

石堂丸は五歳に及んで文字を讀むこと大人を凌駕し、みんな彼を神童と稱する。八歳になつて寶滿山竈門山の僧坊に入つて儒學をまなぶ。彼は八年間この山にあつて經子史集の四庫の書を悉く暗記したので一山の僧は舌をまき、老師宿儒は面に汗し、その上に立つ者はなかつたと謂はれてゐる。十五歳でありながら身長技群に伸びて普通人の二十歳ぐらゐに見え、力量も人々にまさる。家に歸るに及んで父繁昌は彼に武を學ばせるとて自ら毎日彼を道場に出して弓馬の術を敎へたので忽ちにその道の妙を會得する。殊に技神に入るは馬術であつて、彼が原田といふ人の家に招かれて酒宴中、後庭が俄に騷がしく家内の者があわてゝゐるのを不思議に感じて主人にそのわけを問ふ。亭主の原田は『きつと惡馬の荒れ出したのでござらう、肥後天草から稀代の荒馬を得たれど如何なる馬上の達人でも側に近寄ることかなはじ、怒る時は口附の者十人でもとゞめることが出來ない、中には踏み殺されたものもござる、今もまた誰か怪我した

ものであらうか、心配のことでござる』と言ふ。石堂丸は笑つて『馬は人の乘るべきものにきまつてゐる、たとへ龍にもせよ、馬と名づけたからは乘られぬことがあるものか、それがし乘つてお目にかけよう』と座を立てば、原田は袖を引いて『弱年の御身には實にけなげな事でさすがは繁昌殿の御子息だけござる、さりながらこの馬は普通のものに非ず、御無用々々』と押しとゞめる。石童丸『仰せはさることながら、繁昌の一子と生れて惡馬を目前にさしおいて聞き怖れて逃げ歸つたとあつては世の人の嘲けりを買ふ、惡馬の蹄にかゝつて死ぬよりも恥かしく候、是非なきことゝ思召したまへ』との言葉に原田も默然とする折柄、惡馬は六七人の舍人の中に黑煙をたて鼻嵐を吹いて飛び來る。得たりかしこしと石堂丸は袴の股立ち高くとつて庭におりて惡馬の傍に駈け寄り、隙を見すましてひらりと乘つて口附の者共に『そこ放せ、怪我するぞ』と言へば舍人達『いや、この口を放せば若君いかで鞍の上にゐられませうや』と放つ

べき樣子もないので彼はばつて一鞭あてればどつと一散に駈出して舍人等はみな振り放されて倒る。人々があれ〳〵と見るうちに彼は門外へ乘出して行方知れずになつたので一同は驚き騷いで『さあ大變々々』と跡を追ふに、芦城の驛路の横道に乘入れて靜に輪をかけてゐる、とても人間業とは見えず人々は驚き呆れる。石堂丸は馬から下りて舍人を招いで『もう心配するな、安心して引いたがよい、決して今後は人をなやますやうなことはない』と言つて引渡す。さしもの荒馬も鈍馬のごとくに自由となる。原田はこの童子あつぱれ浮世に名をあらはし、家門の榮えをなすもの、娘桂子と娶合せて行末の安樂を見たいものだと思ひ、くだんの馬に梨地の鞍置、紅の厚總をかけて彼に贈る。

彼はその馬に打乘つて博多に歸り、父にこの由を語つて馬をも示す。父繁昌つく〴〵とその馬をながめて『吾は弱冠の頃から北國に生長して强馬を乘ること人に優れたが、こんな馬をつひ見たことがない、なか〳〵この馬では地道で

も乘り廻すことはできぬ、汝は吾にまさること遙かである』と稱賛する。同國の住人芦屋の庄司が來つて『原田氏は石堂丸殿の勇を慕つて寵愛の息女を賜つて一家の緣を結びたいとのねがひ、某を仲人にたのむによつて今日推參つかまつる』と告ぐ、繁昌も大に悅び『原田氏の息女とは桂子のことか、傳へ聞くに原田氏の內室は安樂寺に祈つて儲けられた娘なれば聖廟の「御母君の月の桂も折るばかり家の風をもふかせてしかな」の御歌をとつて桂子と名づけて聰明の姫なる由かくれもなし、貴殿をたのみまゐらする、かの姫を迎へとつて愚息にめあはせんこと誠に嬉しうござる、とくとく原田氏へこの由お傳へくだされたい』といふ。かくて吉日を撰んでその用意をなし、石堂丸は元服して加藤新太郎繁氏と名乘り、水城の堤の南の苅萱の關に新亭を建て住所とし桂子と棲む。

（二）

苅萱繁氏の妻桂子は容貌の美しいのみならず文は淸少納言、紫式部の二女に恥ぢず糸竹のしらべも世にすぐれ、嫉妬の心なく婦德そなはれば家はとゝのひ閨門のうち能く治まる。或夜彼女は不思議の夢を見る、所は箱崎の松原とおぼえて一人の童子が短冊を持ち來つて與へる歌に「馴れてみるみぎりの松のよろづよを千度かぞへん鶴のもろごゑ」とある。夢さめて後ほどもなく一女を產む。繁氏はくだんの和歌にちなんで千代鶴姫と名づく。繁氏の父繁昌は官を辭して繁氏にその職をつがせんことを奏し、聞きとげられて繁代かはつて守護職に任せられて衞門の佐となる。まもなく繁昌は子繁氏と入れ代つて苅萱關の新亭にて病死し、これを茶毘に附して遺骨を高野山に送りて收むることを遺言す。繁氏はその意をまもつて臣下をもつて遺骨を高野山に持たせやつて納めしむ。しかるに一月を出でぬに繁昌の妻もまた良人の跡を追つて此世を去る。桂子の歌に「君こふる涙はきはもなきものを今日をば何んの果といふらん」と、折りか

ら時鳥の鳴きわたるにまた「なき人をしのぶる宵の村雨にぬれてや來つる山ほとゝぎす」と詠ず。繁氏もまた「人こふるわが身もつひに消えゆくと殘り多かる涙なりけり」とよむ。

繁昌の妻の弟に中井權藤太數高といふ男あり、心よからぬ男なりとて彼女は對面することなき仲であつた。彼はせんかたなくて阿波國に行つて世を忍んでゐたが、繁昌夫婦が死んだことを聞いて密に當國に入り來つて蘆城の驛路に身をひそめて原田氏の家人に近づき緣をもとめて己が妻爪木を桂子の方へ給仕女に出す。これは爪木としめしあはせて奸計をなさうためであらう。彼女は博多の館に到つて奉公給仕も晝夜休みなくつとめ、朋輩の勞をたすけて賄賂をほどこし方便をつくすほどに今はこの屋形に此人なくてはかなはじと俸祿を厚くたまはり桂子の側ちかく仕へるに、桂子は彼女の心の上におもねる佞人原に似るところあるを見て爪木の言ふことは取上げぬやうにつとめる。

そのころ同國城の山といふところに曾て朽木尙光入道心佛と稱する人あつて京都の武士で鎭西の監察となつて久しく此地に住し、武勇には加藤繁昌、文才には朽木尙光と並びもてはやされたものだが、繁昌より三年前に死んでからその屋敷も荒れ果てゝ今は入道の娘千里姫を守りたてる善内兵衞介保といふ夫婦が微に人烟を絕さずわびしく住んでゐる。この千里姫は父に似て文筆の才あつて容色また優れるところから四邊の武士共はいろ〳〵の手をもつて妻に迎へようとすれども善内兵衞は姫を名もなき武士の妻とすることを欲せず、彼女もまたこのまゝ朽ちるとも心なき者の妻とはならじと誓つて、むなしく年月をおくるほどに今年十八歳となる。繁氏或折りこのわたりを過ぎて彼女をふと見初めてその心のわりなきを言ひ送るを彼女もこの人こそ聞き及ぶ文武の達人、和漢の學才にて朝家の聞えもたぐひ稀れなればと「かゝる人をこそ淺香山かげさへ見ねど淺くやは思ひまゐらすべき」と文こま〴〵としたゝめて返す。これより

忍び〳〵に語らひて深き契りを結ぶに、繁氏は彼女を苅萱の舊館に迎へとつて善内兵衞介保に恩祿を與へてその屋形を守らせ、彼女に侍女を多く差添へて昔に歸る千里姫の榮華となす。

權藤太數高はこれを漏れ聞いて『これこそ内亂のおこる萠芽、吾が本望の達する時の至れるぞ、かゝる淫亂なる繁氏を地藏の再誕なんぞとはちやんちやらおかし』と獨ほくそゑむ。彼は直にこのことを妻爪木に告げ、爪木は黨類としめし合せて折を伺ひゐるに、桂子或夜ひとり燈前に書をひらいて眺め『都府樓には僅に瓦の色を見る、觀音寺にはたゞ鐘の聲を聞くとは菅原道眞公がこの國に於ての御詠である、妾はいまだその都府樓の跡も見ず、觀音寺をもたづねたことがない、近いうちに行かうものを』と思つて誰かあると呼ぶ、爪木とその一黨の女、櫻木、淺茅、岩戸が一同そろつてまかり出づ。桂子『妾はいま文を見てこの國の舊跡都府樓、觀音寺をはじめ濡衣の女が塚などたづね見たいと思

ひます、このよし殿に申して同道にてめぐり歩き、そちこちの所にて歌など詠じて詩をも作らば誠に興あること、みな〳〵はどう思ひやる』と言ふ。爪木、櫻木は言葉をそろへて『御前さまにはまだ御存じなきにや、殿樣にはこの春より城の山入道とやらの娘千里姫と申す淫亂な女に迷ひたまひて夜晝かのもとにお通ひあり、望月殿、家木殿は去年高野に行きて後の長旅の勞に病おこりて出勤なく、堀内は四國に使してまだ歸りませず、千脇殿は大老にありながら日夜の酒に酩酊して何事もたづさはらず、殿樣はこれ幸ひと思召されて苅萱の古御所にその女を引入れてさながら御前のやうに宮仕の女の數知れず、その威勢は日々にまさりて傍に人なき振舞、こなたに仕へる者共は勢ひを失つて見る影もござりませぬ。さるころ住吉へ御代參としてこれなる岩戸、淺茅まゐられたに苅萱殿よりまゐつた女、千里御前の祈願として一通の願書を寶殿にこめ置いて歸つたは疑ひもなく吾君さま調伏の願書でござりませうと、お社の人に當座の

引出物とらせて件の願書をとつてまゐりました』とその願書を差し置けば、岩戸、淺茅は言を揃へて猶も『申上げますとほり、かくては御前さまをはじめ私共は有るに甲斐なき世の中に住むばかりの身の上やと日夜に胸をいため、吾君さまの御行末の覺束なさに神に祈り佛にねがひまするに、うらやましくも千里姫の御方は日夜の酒宴亂舞に秋の夜も短しと月にかこち、春の日もなほ暮れるに早しと怨みませうものを、此方にてはたゞ千賀の浦のみるめばかりの御契りに口惜しいとは思召しませぬか、まあ〳〵この願書をごらんあそばせ』と訴へる。

桂子は色を正して『皆々は妾がもとに仕ふるものともおぼえず、無下に愚な心や、その願書を開くに及ばず、妾がおさめ置いて早足に與へて詮義するもよけれど人をそこなふは心うし、早く火中すべきぞ、千里姫のことは妾とくに知つてはをれど心に聊かの妬ましさもなし、女の德といふものは嫉妬のなきが第

一、嫉妬の念ひとたび起らば身を亡ぼし家をくつがへし、百千の禍の根となるさればこそ源氏物語にも嫉妬のことを書く、もとより殿には男子なし、寵愛の女數多ありとて何の憚りあらうぞ、殊更千里姫は氏素性も正しく、尙光入道はふはわすれぐさ己が上にぞおふるなりけるとの歌など知りませぬか、などてさる御事のあるべきや、千里姫も今はたゞならぬ御身のよし、あはれ男子誕生あれかし、妾は養ひ育てゝ繁氏殿の御代つぎと仰がせて千里姫と諸共に老いの樂しみを期せんとて祈らぬ社もなきものを、御身達は妾の心も知らず、さて〳〵うたてき心やな』と奥の間に入る。

四人の女は赤面してやう〳〵局へ歸る。爪木はその夜は寢もやらず思案して、ひそかに寶藏に忍入つて山鳩といふ桂子秘愛の寶刀を盜みとつて局にもどり、桂子の御めのと中村勇太早足に只今至急の御用ありとく〳〵御出仕と言ひ

送る。早足の來るのを待ちて『さても吾君さまに一大事の御事あり、中村殿とそなたならでは頼む人なしと吾君さま、思ひきつたる御氣色にて、もし此事を承引せずして妾が願の成就せずば忽ち死なん、中村殿とそなたは男女の變りはべれども忠心には變りなし、早足が心底は聞くに及ばず、必ず違背せず事成就せしめんことの誓をたてよとの仰せ、自らが恐しき誓の數々をつくせば、吾君さまも嬉しや得心の上は大願成就うたがひなしと一々事の次第を命じたまふ、そこもとにも定めし御違背あるまじ、さりながら自らも誓をたてし上は主君のおためなり、御誓言を承はる上にて明し申さん』と言ふ。早足『事あたらしき御事かな、姫君御出生の時より片時も離れず御奉公せしこの早足、そも何程の御大事なればとて左程に御心をおかるべき仔細なし、されど兎も角いかにも誓言つかまつる、當國の靈社香椎、箱崎、住吉、安樂寺の聖廟をかけたてまつりて御望みのこと違背いたすまじ』と答ふ。爪木『忝けなき御志よ、そもく

吾君さまの御願ひとは苅萱古御所の千里姫を早足に命じて人知れず殺して得させよ、これ御家安泰のためとの仰せぞ』と言へば早足は大に驚き怪しみ『それには確なる吾君さまの證據あるか』と問ふ。爪木『これほどのこと證據なくてやあるべき、これを御覽せよ、自らは存ぜねど姫君の仰せには、早足もし妾の命にあらずと疑つた時にはこれを出して見せよとのこと、そもこの刀はいかなる仔細のあるものか』と言ふ。早足は『いままではよもや姫君の御意にはあるまじと思つてゐたが、この御刀を見て疑ひ氷解いたした』と漸く承引する。

早足は心に思ふやう、罪なき人を害すれば必ず桂子殿の御身に報ひあるは心苦しいことである、嫉妬によつて人をそこなつてその身に報はぬことはない、漢の呂后、梁の郗后の例もある、千里姫は繁氏の種をやどしてゐると聞く、どうかして助けたいものだ、年月すぐるうちには妬み心もやむ、一旦はかゝる企あつても他日かならず後悔あるに違ひない、如何にしたならばよからうかと

思案し、何事か心づきたることあつて苅萱の館へは行かずに漆河へと急ぐ。この河のほとりに二十歳ばかり眉目のすぐれた女が五歳の幼子を抱へて普門品を讀んで往來の人の憐れみを求めてゐる。袖にすがつて物を乞ふやうなことはせず、男共が彼女の艶なるにかれこれと言ひよつても一向に應對せず、たゞ顏を赤らめてうつむくので人々の愛敬を受けて評判となる。早足が曾てこゝを通りかゝつた時に物を與へたことのあつたを思出し、これ天の與へ、この女は吾手にかけずとも飢寒にせまつて死ぬ命、これを斬つてその首を千里姫と僞らう、可哀さうだが跡ねんごろに弔つてやることにしてと側近く寄つて錢を與へて、『いかに女、そなたは何處の者か』と問へば『幼い時から此地に住んで乞食してあれば何者の果か存じ申さず』と答へる。早足『いや〳〵女よ、つゝみ隱すこと勿れ、元からの非人にてはよもあらざるべし、年はいくつ、名は何んと』と問ひつめる。女『おたづねのこと申しはべらんとすれば先だつものは涙に

候、かく落ちぶれてはあれど元は名ある者の子にて都に育ち、この國へは主君に從つて來りはべる、しかるに主君は任のうちに病死したまひ、家を繼ぎたまふ男子なく、姫君一方ましませど盛衰にしたがふ下々の習ひ、日々に仕へる者も離散して御めのとの何某と自らばかり殘りとゞまりましたが、御暇をくだしおかれたれば力およばず出で立ちましたれど右も左も知らぬ旅先、こゝよかしことさまよふ間に玉田與次清忠といふもの言葉を巧みに語らふに連れ立つて家に行けば清忠には妻女あり、すなはち此子の母にてはべる、かゝる子まである仲を情けなく追出す、妻女は古里に歸れども吾子のことを思ふ親心、夜々忍び來て吾子に乳を呑ませ、或夜雪の降るに例のとほり戸の外にたゞずむを妾は知つてさぞ寒からうと清忠の眠るを待ちて戸を開くに妻女は雪に凍えて息絶え、妾の泣くに清忠も走り出てこのさまを見て後難を恐れてやまた菩提心のおこりてか、その夜のうちに行方しれずなり、跡に殘つた清忠の老母と妾はこの子を

抱へて路頭に迷ふ有樣、老いし母やこの子を養ふためには死ぬにも死なれぬ妾は身まかりし妻女の跡を弔ひ罪障消滅のため斯くほ普門品を讀誦いたしてをりまする』と首を垂れる、その襟足の淸く白きに彼は斬りかねてむしろ憐れに涙の流れて日頃の勇氣もくぢけ、欺き殺すよりも因果をふくめれば聞き入れぬこともなかりさうな賢しき女と思つたので『さて〳〵あつぱれの賢女かな、老いたる母とその子を安樂に養はゞ、そなたは吾が望みにまかするか』と問ふ。女『仰せまでもなし、それ故にこそ人々に面をさらせ、今にてもこの子を育て〳〵出家となし、老母を養つて最後を見とゞけくださるならばたとへ吾身をもつて新身の刀をためされようとも露塵ほども命をしとは思ひませぬが、たゞ妻妾と呼ばれることは財寶にあきみつるともお斷り申します』との答、早足『しからば心底を明さん、某はこれ當國博多の守護加藤左衛門繁氏の北の方桂子殿に仕へる中村勇太夫早足といふ者なるが、繁氏の愛したまふ千里姫を討つべく某に

命じたまふ』女『なんと仰せ候か、その千里姫こそ若城山の住人尙光入道の息女、妾の主人にてはべる』早足『左樣にてありつるか、さても不思議の因緣や、某は千里姫を討つこと不憫と存じて實は御身を斬つて身代りになさんと思つて來たのである』女『さては淺ましきこの身を姫君の御身代りとなしたまはるか』早足『言ふにや及ぶ、誠に有りがたきことなり、人の見とがめぬうちに』と身構へすれば、女『老母とこの子を願ひまする』早足『老母は某の母とし、この子は某の一子として出家せしめること相違なし』女『かたぢけなうございます』と手を合す、南無阿彌陀佛の聲と共に美しき若き女の首は前に落つ。

千里姫は苅萱の古御所にて筑紫琴をかきならし「七尺の屏風も躍らばなどか越るざらん」と爪音たかく謠ふ折柄、桂子の御めのと中村勇太夫早足と善内兵衞介保とが打連れだつて密に來て『事急に候へば詳に申上げませぬが一刻も早くこの御所をお立退きあつて箱崎より商人船に召して播摩國明石の浦へ到らせ

たまへ、彼處には介保が妻の兄井口嘉平太と申す者の候へば彼をお頼みありて暫くお忍びましませ、すなはち御供には介保が妻雲井を召連れさせたまへ、彼は男にもまさりたる者にて甲斐々々しく候へばお心やすく思召されよ、船中にては西國順禮の者と仰せあるべし、繁氏公と再び御對面あるまでは必ず御身をつゝしみ、御產御目出度くいたされ候へ、事の仔細は跡にて相知れ申さん、かく申す間も心もとなし、雲井は用意してお庭に待ちて候』と言上する。千里姫はたゞ夢心地にて『まづ仔細を聞いてこそ兎にも角にもなりなん、如何なることにぞ』早足『千言萬言よりもこの首を御覽あれ』と白綾小袖に包んだ女の首を出して一部始終を物語る。千里姫『こは彌生なり』とその首を抱いて歎く。かくて千里姫は介保の女房雲井にともなはれて落ちのびる。

善内介保はあとにて早足にむかひ『御邊の御厚志なければ何をもつて吾姫の一命をたもち得ん、この上の計略は彌生の死骸を姫君の閨中に入れ置き、何者

の仕業とも知れざる態になさん』と言ふ。早足は彌生の死骸を持ち來つて介保に渡す、介保はその如くにとりはからつて自分は責任を負ふた形によそほつて遺書をしたゝめて自害する。早足は彌生の首を持つて博多の館に立ち歸つて爪木に示す。

（三）

頃は仁平二年の彌生中の頃、繁氏は妻桂子と望春亭に遊宴して詩歌の吟詠、糸竹の調べ、その興たけなはにして繁氏曰く『いつぞや當國の歌枕を見まほしと望みたまふ由、やさしき所望にはべれば速に同道して見せまゐらすべきことながら政事繁多にして今に於てもその義に及ばず、何れの日か暇を得て國中を見せまゐらせんかその期もはかりがたし、こゝに父君當國下向の昔その地理をわきまへ知らんため千脇源太左衞門たゞ一人供としてひそかに當國をめぐりて

悉く書きしるし、橋本嘉心とて畫をよく描く者に圖をとらせて寶藏に深くおさめて猥に見ることを許さずと雖も今日この亭に於て見せまゐらすべし、これ居ながらにして國中の名所舊跡を知る』と箱を開いて一軸を取出して桂子に指し示して一々の物語をする。

追々と物語のすゝみて濡衣姫の憐れな話となつて『汝等かまへて常住の思ひをなして歡樂に耽けり貧着の心あるべからず』と言へば桂子は感じ入り『まことに仰せとほりにてはべる、かゝる定めなき世にありながら女はわけて無常の迅速なるを知る者なく、粉黛をほどこして美色をかざり絃歌の淫聲に男子の心をとろかす、罪深き身にてこそ候へ、その上に猶ほ人の愛を奪ひ、妬心をたくましうす、なげかはしきことや』と言ふに滿座ひそまりて物音もなし。岩瀬の局すゝみ出て『お二方の仰せ吾々ごとき心なき耳にさへ感じ候、さりながら何とやらん說敎者の法談を承り候やうに頻に無常を觀じて御酒宴の席ともおぼえ

ず打ちしめつて忌はしげに相見え候、殿にはこのほどよりの御政務のお疲れ、今日たま〳〵のお遊びなればかく物堅きはよろしからず』と李夫人といふ名木の櫻の下に席を移して酒盃を改め、岩瀬の局は一さし舞ふに滿座やう〳〵色めき立つて歌舞音曲さま〴〵の催しあり、桂子は盃を繁氏に返し『まことに局の計らひにあらずんば今日の宴は何んとやらん打ちしめりて心よからず、興なき風情なりしによくも取りはからひつれ、君にもいま一献きこしめなされかし』と酌をとつてすゝめる。繁氏『げに尤もなり、局が働きにてかくは春の興を催し、殊に某が秘藏の李夫人の花のかげ一しほ面白き酒宴、岩瀬が才覺げに感じ入つたり、歌一首を詠じて局にあたへたまへ』と自ら筆をとつて待つ、桂子『かずならぬ身をも忘れて木の下の花に馴れぬる春の夕ぐれ』と詠ず。繁氏も『山櫻また一花もちらぬまは心のよそに聞くあらしかな』と詠ず。時にまだ蕾の花房一つ繁氏の盃の中に落つ、繁氏は盃中をちつと見て『そなた見ずや、この花

いまだ開かずして落ち散る、人間世にたとへば二十歳前後に老いたるに先き立つがごとし、惜しまれる時に散りてこそ世の中の花なれ、この花の蕾ながら斯の如く落ちたるは繁氏が年の若きに家の繁榮にほこつて世の中の常なきを忘れ、色を好み酒に溺れ後世のことを思はざる淺ましさを流石に佛神の戒しめたまふと覺ゆ、浮世にながく心をとゞめて誠の道を忘れてやあるべき、今日の宴會もこれまでぞ』と席を立つて直に學問所に入る。

繁氏はつら〳〵世の中の仇なることを觀じて誠にこの身のために日々にいとなむところの業もすべて流轉の種でないものはなく、速に遁世しようとしても名利の毒酒に酩酊して恩愛戀慕の擊縛につながれてゐる、今日の酒宴に蕾の花が盃に落ちたは佛のさとしたまふたのであらう、何んぞ名利恩愛の塵中にいつまでも戀々として生を過すかと思ひなやんでゐるところに、今日の酒宴の席へも病氣とて出て來なかつた爪木がひそかに忍んで來て、大息ついて申すに『自

ら今日の御酒宴にお供いたさず候ひしはゆゝしき大事の出來して何とぞ殿に告げたてまつりたく心を碎きてこゝかしこにたゝずみ隙をうかゞひはべりし故にて候、さても吾君桂子樣には如何なる天魔の入りかはり候やらん、苅萱の關にましますす千里姫の御事を朝夕お憤りあつて昨夜御めのと勇太夫早足に命じて姫君をあへなく討たせたまへ、何者の所業とも知れざるやう計らひ、今日の御酒宴にもさりげなき風情にて、御遊の席にましませし御心のほど吾君ながら恐しき御事、御油斷あるべからず、殿をも恨みさせおはしまさんも計りがたく候』と告ぐ。繁氏は大に驚き『こは思ひがけなき珍事、今更いかんとも致す術もなし、さりながら桂子に於て左樣な殘忍な行跡あるべしとも思はれず、疑はしいことかな』爪木『殿お疑はしくばこれ見たまへ』と千里姫の守本尊を出して厨子を開きて『吾君は早足を討手に命じたまひし折から吾いまだ千里に對面せざればその面を知らず、彼が首を討ち來るとも正しき證據なくばと裏をかへせし

お言葉に早足はもだしがたく御首と共にこの守本尊を取り來る。吾君はそれを見たまひて、げにこの扉の歌は吾が詠歌の指南であつた古人道の手跡なり、いまは疑ひなし、首と共に何地へなりとも埋めよとて自らにたまはりしを、御首は早足に渡し、この厨子は後日の證據として密に自らたづさへて御覽に入れ候なり』と言上する。繁氏は扉を開いて見れば「いつまでと思ふ心も初瀬山尾の上の鐘のあはれ世の中」とあつてまがふ方なき千里姫の守本尊である。繁氏『いかに爪木、此事は暫し人に沙汰するなよ、吾れ思ふ仔細あれば』と言へば爪木はすましたりと悅んで去る。繁氏は大に驚いて、桂子および早足を斬つても捨てんと怒つたが、元來かゝる亂を引起したのは自分一念の迷ひの路に踏み入つて、女色に溺れて邪婬を犯した罪からはじまつたので、遂には人命を斷ち瞋恚を女におこさしめたこともすべて自分のなすところ、誰をも怨みとがめることはない、いま桂子の殘忍を深く憎んだは恥かしいことである、煩惱則菩提、た

だ何事も一睡の夢だ、南無阿彌陀佛と小柄をもつて元結をふつと斬り捨て、扇に「ましらなく深山の奥に住みはてゝ馴れゆく聲や友ときかまし」と書いて殘し置き、便門から忍び出て比叡山へこゝろざして夜半にまぎれて立ち去る。

彼は京師に行き通ふ商船に便をもとめて乘り、攝津國河尻に着き、それから一向專修念佛の黑谷の上人を比叡山に訪ふべく京都に向ふ。

やがて繁氏法師は比叡山に登つて先づ根本中堂に詣で心しづかに拜したてまつり、それから黑谷に行き、かねてより傳ひ聞く慈眼坊叡空の往む庵の門内に入つて『これは九州より世をのがれて佛の道に入るべしと一筋に思立ちて禮儀作法をわきまへざる不恙者の田舍法師がまかり上りたるにて候、あはれ推參の罪をなだめられ御坊中に召仕はれば薪を樵り水を汲むの勞は更に身をおしまず勤めはべらん』と高聲に言ひ入る。おかしな男が來たぞと坊主共が飛出す、叡空は遙にその聲を聞いて自ら立つて妻戸を押開いて『あれ過ぎし夜の夢に九州箱

崎の社より宮人來つて太神の惠みいつくしみたまふ人を御坊に暫く預け置きたまふとの御告ありしはそなたがことなんめれ、これへ上りたまへ』と請じ入れて『和僧は如何なる所存ありて愚僧が庵室へはたづね來りしぞ』と問ふ。繁氏『某が望みは學問をはげんで出世の僧とならんことを欲せず、隱遁の思ひのみにてはべる、攝津國河尻に船着きしてから此處彼處とさまよふところに年齢拔群に高き翁が鳩の杖にすがりつゝ現れて某を招きて、何ぞ速に比叡山に登らざるか、そも〳〵彼山は學匠三千に餘つて八宗の英傑星のごとく集り、いづれの人に學ぶとも佛敎の奥義をきはめざらんや、中にも黑谷には現に大勢至菩薩ます、假に沙門の身と現じて暫く顯密の敎を學侶と共に學びたまひ、時の至るを待ちたまふ、しかれども肉眼をもつては何れが勢至の應現ぞと知る人さらにあるべからず、吾れ汝をあはれむが故に敎示す、彼上人の本意は衆生成佛の徑路は、一向專修の念佛にありとして後年必ず上人の化導大に振ひ、四海こと

ごとくその德を仰ぎて人々みな稱名の一行を修せん、この淨土敎は釋尊出世の本懷、時機相應の法にして萬行の宗敎、衆德の根元なり、汝かならず彼上人にしたがつてたゞ佛願をたのみ自行化他ともに唱名をもつて第一とすべし、吾はこれ汝が生國箱崎の神なりと仰せられ候、今もこの門外の鳩が庵の中に入りて候ゆえ上人はこゝにおはすなんめれとてお訪ひ申せしなり、なにとぞこの御坊中にて、御敎化を蒙りて年來の本意をとげばやとて推參つかまつりて候』と言ふ。叡空は心中にこの遁世者は尋常の者ではなく、箱崎の神慮にかなふも尤もであると思つたが、表面は只さりげなくもてなして發心の因緣をたづねるに、繁氏は始終つぶさに物語る。叡空『善哉々々汝愛欲を斷じ諸有を空とす、この關を越え來れり、何れの道をか難しとせん、しかれども道高きこと一尺なれば魔の高さは一丈とは古哲の戒しめであり、ゆめ〳〵怠ること勿れ、他日もし古鄕の妻子眷族たづね來るとも必ず相見ることあつてはならぬ、すなはち汝が志

を奪ふ魔障である、堅く防ぎて近づくなよ』と彼を寂照坊と名づく、時に仁平二年四月、生年二十一歳である。

（四）

千里姫は勇太夫早足の働きで危難を逃れ、介保が妻雲井一人をたよりとして遠な舟路を辛じて播州に至つて雲井の兄井口の嘉平太といふものに始終の仔細を告げて、再び繁氏から迎ひの來るまで此處に隱してくれよと頼み入る。或夜のこと千里姫の部屋にて忍びやかに物語る聲がするので、雲井は怪しみて覗き見れば、一人の老僧が千里姫に何事かを告げてゐるのに耳をそばだてゝ漏れ聞く。その語るを聞けば、千里姫を害さうとしたのは桂子の命ではなくて爪木の謀であつて、彌生の忠死のために命を全ふすることができ、介保は身代りの計をよくするとて自害する、繁氏は千里姫の死を聞いて出家遁世する、繁氏の出

家遁世を朝廷に奏聞すれば、博多の守護は桂子の親元の原田氏に命ぜらる、繁氏の臣下は一人も離散しないで幼女を守りたてゝ名跡をつながせよとの勅を受く、しかるに權藤太數高が訴訟をくはだて繁氏謀叛の由を奏す、千脇望月が主君が聊も不義の企てなきことを申しひらいたので、數高が誅せられることになつて逐電し、いまはこの國の邊土に隱れる、爪木を捕へて良人の所在をたづね問へば、きびしき調べに自分のたくみの數々を悉く白狀する、繁氏の行方をたづねるとて舊臣が諸國を徘徊して、東西に奔走する、近頃原田氏の家人日野藤次といふもの當國高砂に來り住み、所の名主を招いで、九州の苅萱殿が所縁をたづねて隱れ住んでゐるかも知れぬから探してくれ、袞美は心にまかせると頼む、住民はこれを聞き誤つて、九州探題の苅萱殿が朝敵となつて高砂の浦に隱れ住む、探し出してからめ取つた者は袞美がもらへると噂し合ふ、これを聞いた亭主嘉平太の甥にあたる馬路の兵藤次、叔父喜平太がかくまつてゐる女こそ

苅萱の身内の者にちがひない、からめとつて褒美のお金にありつかうと叔父嘉平太と相談して手筈を定める、老僧はかく語つて來て『御身は近々に胎中の子を産し、しかも男子ならばゆゝしき大切なる身、早く雲井と共に立退きたまへ路のほどはお心やすかれ、この法師が見え隠れに御供して便りよき方まで送りとゞくべし、吾は當國法花寺に住む狐なるが、本尊觀世音の佛勅によつて御身の影身に添ひて危難をまもる、猶ほ行くさき〳〵にて形を現さん』と、忽ち白狐の姿となつて失せ去る。

雲井は御家の一部始終を聞いて歎きゐる千里姫をせきたてゝ闇夜を足にまかせて落ちのびて行く、彼女等は狐火を知るべとして走るほどに後方から人聲が騒がしく松明も多く次第に近づいて來る、必ず嘉平太父子であらう、如何にせんと途方にくれてゐるところへ、最前の老僧があらはれて『この所に大山寺といふお寺あり。そこに暫くお隠れあれ』と導いて堂内に入る。やがて嘉平太父

子は多くの惡人輩を引連れ來つて老僧のたゝずみゐるを見て『汝は朝敵の妻妾どもをかくまつたな、さあ出せ』と迫る、老僧は仕方なく二人の女性を室内から連れ出して渡す。彼等は女性二人を肩にかついで去つたが、松明も消えて道がわからず、山野を迷ひ歩きて夜を明す、夜明けて見れば肩にかついだのは女と思へば二つとも卒塔婆である。大山寺の住職は本堂に二人の女のゐるを怪しんでその由を聞いて氣の毒に思つて、門前の家をとりつくろつて其處に住ませる。千里姫は漸く安堵してか五七日たつて安すらかに男子を産む、父繁氏の幼名にちなんで矢張り石堂丸と名づく。

苅萱は叡空師の室にあつて出離生死の要路、自行化他の捷徑には何れの敎がすぐれたものかと同室の沙門に問ふてもいまだ稱名念佛の一行が最勝であると示す者がない。こゝに苅萱よりも一つ年若で生國は美作國久米の人で源空と呼び、その容貌の凡ならぬところあつて、苅萱は餘り年若なので心にとめないで

をつたが、いまはこの人のほかに聞く人なしと思つて、或夜ひそかに彼の部屋を問ふて日頃の疑義を聞ふ。この若僧こそ後に法然上人となるの人、答へて曰く『このごろ貴僧が諸賢について尋ねたまふところ衆僧が答へられる趣き傍にあつて聞くに未だ曾て貴僧の心にかなはずと思ひはべる、愚聾の吾れみだりに舌を動かすべきにあらねども、そも〳〵一代諸教の中に顯密、大小、權實の部は八宗にわかれて義は萬差となる、或は萬法皆空の宗を説き、或は諸法實相の心を明し、五性各別の義をたて、悉皆佛性の理を談ず、皆これ經論の實語であり、如來の金言である、教のごとく修行すれば誰か生死を出でざらん、しかれども險夷曲直、難易ところを分つて無量である、或は崎嶇として行ひがたき道あり、紆廻にして至りがたきあり、念佛の一行は夷坦にして至り易く、惑業を斷ぜずして輪廻を出づ、六方の諸佛ひとしく稱讃したまふところ、和漢の先達おなじく勸めたまふ要法なり、造惡不善の輩、破戒淺智のやから此門によらず

んばいかでか出離の期あるべき、かほどのこと知らぬではあるべき、なれども某が所存をあらはせよと仰せにまかせて申すめり』と、苅萱は頭を地に付けて『日頃の所願の今日こそ成就しつれ、南無西方極樂世界、大勢至菩薩摩訶陀』と感涙をながして禮拜する。

それからは苅萱をり〳〵人目をしのんで、源空の教誨を受けて信心日々に深く、行住座臥に稱名念佛のほか餘修することがない。叡空は九州の遁世者こそ誠にいみじき道心であると常に寂照坊と呼ばずに道心と呼ぶ、他の僧等もまたそれを眞似て道心坊と彼を言ふやうになつた。彼が源空の部屋に行つて日夜をわかたず法談を聞くので同列の僧徒はそれを妬んで『自分よりも若法師に物を學ぶ筑紫坊主の馬鹿』と罵り嘲り、また源空師が物も知らぬ田舍坊主を後世者だの遁世者だのとほめる馬鹿らしさ、念佛など愚婦愚夫の眞似をする輩、そのまゝにして置いては一山の魔障である、打殺してしまへと、密に計略をめぐら

す。源空はこれを知つて夜こつそり苅萱の一室を訪ふて『空腹高心にして如來の了義を知らぬ狂者ども足下の淨業を修するを笑ひいやしみ、あまつさへ害をくはへようとする、彼等は念佛の行者を愚夫愚婦と嘲る、馬鳴、龍樹を罵つて文殊、普賢をそしるに等しきことを悟らず、隣れむべし、しかれども彼等の惡心さかんにして足下の命は旦暮にせまる、早くこゝを逃れて南紀高野山に隱れて惠命を全うしたまへ、暫くもとまるべからず』と言ふ。苅萱は『尊命にまかせはべらん』と急に用意して假初の佛詣のやうな樣子をして叡空師に暇も告げずに叡山を下つて高野山へと向ふ。

（五）

石堂丸は播州大山寺の門前に隱れ住む千里姫に育てられて既に十四歳の年を迎へる、日頃どうかして父繁氏の行方をたづねたいものだと思つて、或日母に

そのことを言へば千里姫も大に悅び『いみじくも思ひ立ちたまふものかな、自らも年月たゞ其事ばかりなりしに、このほど繁氏公の御住所を思ひがけなく聞き得たり、初は比叡山の黑谷とかにおはせしが、その後に高野山に登りたまふと物語る人あり、さりながら此事を大山寺の阿闍梨に申すともよも得心したまうまじ』と事の樣を書きしたゝめて殘し、雲井をつれて母子二人ひそかに忍び出る。筑紫を去つてこゝに十四年、船にて浦から浦へと浪の上を過ぎて攝津の國に着く、それより步行にて住吉の社に詣で行末のことを祈り、和泉國を經て南紀高野山の麓、學文路の宿に至る。旅宿の主は玉屋の與次とて常に山上の僧坊へも往來して諸用を辨じてゐるので、案內をたのんで登山しようと思つてその事の仔細を物語るに、玉屋の與次は驚いて『さては苅萱の關におはせし繁氏公は遁世して山上にましますか、この子息は繁氏の御賢息にわたらせたまふか、某も古は筑前に住みし者にて苅萱殿の御威勢をまのあたり見聞つかまつり候に

かゝる御有樣にて某などの住家に入らせられるとは誠に定めなき世の中にこそはべれ』と樣々にいたはつて日々山上に行つて此處彼處とたづね問へども、元來その名を隱してたゞ道心坊とのみ稱して更に生國をあかさぬから知る人もなく、亭主も心をいためていろいろに思案をめぐらして、石堂丸をともなつて登山するとも父の顏を知らぬゆえ何んと對面できず、千里姫も涙にくれて『はるばる尋ね來つる甲斐もなく自らも雲井も女人堂までこそ登れ、山上へは行かれざれば尋ね逢ふこともできず、かくては如何にすべき』と思ひわずらふのあまり、遂に病の床に臥して次第に重くなつて命旦夕にせまるところ、昨日の暮方より玉屋與次の隣の旅宿に行脚の僧、年の頃は二十歳ばかりの者が一宿して今日も疲れを休めて滯留してこの有樣を聞き知つて『出家の役なり、最後の敎化してまゐらせん』と千里姫の枕に近づいて念誦して後世を說いて稱名す。かくて千里姫は永萬元年に無量の怨みをのこして比世を去る。いまもなほ健泰妙尊

大姉と號して學文路の宿に舊跡をとゞめる。

石堂丸は母の葬儀をすました後、行脚の僧に禮謝して母子のこれまでの素性因果を物語るに、行脚の僧は大に驚いて『愚僧は明源と申し、生所は筑前の者にて幼くして父に棄てられ、母は殘ましき死をとげ、中にも五歳まで養育を受けたる厚恩の養母は御身の母君千里姫の御命にかはつて死にし彌生と申す女にてはべる、また愚僧をかく生ひ育てあげて出家になせしは中村勇太夫早足にて今は入道して白心法師と號して、權藤太數高と妻爪木とが重なる罪に耐ち果されんとするところを命乞ひしてたすけ、數高も發心したるによつて相共に旅に出でしが、四年以前に相別れて彼は船にて北國へ行きはべる』と語る。これを隣の部屋にて聞いてゐた玉屋の與次が走り出で『御僧の父の名をおぼえたまふか』と問ふに行脚の僧『愚僧の父の名は玉田與藤次清忠とこそ承り候へ』玉屋の與次『われこそ玉田與藤次なり』と大聲あげて泣き伏す。彼の語るところに

よれば、妻が門前に凍死したのを見るやそのまゝ逐電して國々所々をうかれさまよつて東西に漂泊して遂に此所に來つて旅宿をいとなむに至つたとのこと。その夜は互に不思議の因緣にて相會ふ昔語りをなして明す。かくて彼は石堂丸は明源法師と共は日々に登山して谷々の坊舍をのこりなく尋ねめぐつて探がしたが、その人とおぼしい人にも逢はず、むなしく翌年を迎へてその秋に至つて往生院谷のほとりにて苅萱道心にはしなくも行き逢つた。骨肉の親子は天性自然の感通あるものか互に面は見知らねども、苅萱はしきりに古鄕のことを思出してあはれ九州にてもし恙がなく吾子が出生したならば丁度この稚兒ほどになつてゐるだらう、千里姫はどうしたか、これほどまでこの稚兒が千里姫に似てゐるとはと暫く立ちとまつて石堂丸をながめる。石堂丸も不思議になつかしさをおぼえて、もしやこの人ではないか、年輩といひ、眉秀で眼光の人を射る鋭さ、凡人とは思はれず、必ずこの人であらうと思ひ『如何に御僧、筑紫より來

つて住める遁世者は御存じなきか』と問ふ。苅萱、はつと胸をつかれたが、さあらぬ態にて『愚なる問かな、この一山に住むところの人は星のごとく眞砂のごとく多し、筑紫といふも九ケ國あり、九州はいづれの國いづこの郡、俗名は何某と問はでは知れ申さず』と衣の袖を振りきつて立ち去らうとするを石堂丸なほも追ひすがり『私のたづぬるは九州筑前國博多の守護職苅萱殿と申す人の御行衛を承りたく、去年春よりこの麓の學文路の宿に滯留して今日まで日毎の登山に風雨を犯し雪霜をしのぎ、當山のすみ〴〵くま〴〵迄いたらずといふことなく尋ねさまよふ志を不憫と思ひたまはゞ敎へさせたまはれ』と涙をうかべて賴み入る。苅萱は千里姫の面影によく似てゐると思つたにそれでは吾子であつたか、なつかしや古鄕はどうなり果てたか、名をあかしてこの兒の心をもなぐさめようかと、飛び立つほどの思ひをきつと取りしづめ、いやいや無益のこと、棄恩入無爲、眞實報恩者と聞いて一度まことの道に入つたこの身、あさま

しくも心ひるみて恩愛をたつこと能はずしてまたも三界に流轉して永く成佛せぬ時はこれまでの苦行も水の泡と、落ちようとする涙を押しこらへて『偖もいたはしい御事かな、その苅萱と申す人は御身の父にておはせしか』石堂丸『仰せのごとく、母諸共たづね來て、去年三月母は三十二歳を一期として學文路谷にて苅萱殿を戀ひこがれて身まかり候』苅萱『御身も既に十四五歳と見ゆれば物の道理も聞きわけたまはん、まづこの法師を父苅萱殿と思ひてよくよく聞き召さるべし、凡そ世間の人その妻子舍宅につながれて名利にほだされ、一生をいたづらに送るは佛緣の薄きが故なり、吾れ賤しくも弓馬の家に生れて鎮西の守護としてその威勢は九州を覆ひ富は萬鐘を持ちしても今にては一場の春夢に同じ、なんぞ世間の俗塵をうけて名利の奴となるべきや、汝この年月千辛萬苦して父にめぐり逢はんとす、その孝心天神地祇も感じたまはであるべき、いかに況んや繁氏入道が心の中も言語の及ぶところにあらず、吾れこそ父よと名殘り

てだにあらば御身の悦びさぞかしとおぼゆ、されども父入道はかたく先師の戒をまもりて世緣をいとひ俗塵を遠ざく、妻子たづね來らば則ちこれ太六天の魔王が吾が道心をさまたげんために化して此處に至るなるべし、吾れ既に煩惱の髪を斷じて永く靈山の法臣となれり、いづくんぞ魔軍に降つて二度三界の火宅に歸らんや、その志は確乎として拔くべからずと愚僧は推量しはべる、まことに父の苅萱法師にたづね逢ふとも父子の名乘りはあるべからずと存じ候』石堂丸『御さとし一々御道理に候、しからば某も速に出塵の徒となつて父の跡を追つて佛道に入らん、御庵室にお供して得度いたしたく候』苅萱『いみじき今の一言なるかな、父入道の聞きたまひなば悦びたまはん、いざさらば庵室にともなふべし』と草庵に共に行つて剃髪授戒し、上乘坊信生と名づく、時に仁安元年七月、遂に山下に歸らず、たゞ毎月二十四日に學文路宿に至りて母の墓前に參つて菩提をとむらふ。

日本　苅萱道心

苅萱父子は日夜禮拜誦經し、黒谷の上人からたまはつた鉦鼓を鳴らして源空の敎を信じて念佛三昧に入る。しかるに此事を知る當山の僧の中にて密議をなし、吾山に於て鉦鼓を打鳴らして念佛修行を勤めとする者は高祖大師御在世より以來いまだその例がない、いで彼法師が庵を破却して鉦鼓をも打ち碎いて捨ろと相談する者共あつて一同どつと押入り、父子二人をしたゝかに毆りつけて本尊持經を蹴散らし、この鉦鼓は八釜しくて觀念の邪魔だと谷底に投げ込み、思ひのまゝに亂暴狼藉して引上げる、その道端に大きな杉の樹あつて梢に光明かゞやくものが懸つてゐる、よく見れば投げ捨てた鉦鼓なので僧共は大に恐れて慄ひ上つて逃げ散る。苅萱法師父子は苦修錬行すること既に三十四年、正治元年の八月十五夜、月の清きに『たかのやま松のあらしに雲はれて千里くもらぬ月を見るかな』と詠ずるに石堂丸も『てる月に心のやみもはれぬべし高野の山の秋の夜のそら』とよむ。苅萱が夢に『汝往生の期遠かるまじ、生前に信州

善光寺に詣でゝ生身如來を拜すべし』とあるに驚き醒めて、此事を石堂丸に語る、石堂丸は共に行きたしと言へば『吾れ既に老いたれども身體いまだ健固にして壯年のごとし、長途の勞を思ふこと勿れ、吾れ彼地に至つてその境もし心にかなはゞ則ち彼處に住すべし、汝は暫らくこの庵にとどまれ、この草庵に住して三十四年、柱は朽ち軒は敗れ風雨を蔽ひがたしと雖も必ず修造してはならぬ』と言ひさとして信州への旅に立つ。彼は信州に着いて生身如來に參籠して念佛禮拜すること三七日わづかに飲食し便利をのぞくだけ、かくて彼は堂の近きほとりに庵を結んで住して堂への日々の參籠を怠らず、或時高野山の石堂丸から消息が來たのでその返事の奥に「夏ごろもうらなく彌陀のこひしさに假にも御名をよばぬ日ぞなき」と書きおくる、時に建曆元年。

翌年苅萱の師法然上人死す。その翌年は建保元年、上人一週忌となれど報恩のため苅萱は地藏菩薩の像を彫刻し、また拜禮に來る村の人々に一紙の法語を

書いて與へる、これを苅萱一枚法語と名づけて後世に傳はるもの『一枚法語、
晝あれば必ず夜ありと知るがゆえに燈燭の備をなす、暑あれば必ず寒ありと知
るがゆえに秋の碪の音たへず、老の眠りを驚かせども生あれば必ず死ありとい
ふことは知るや知らずや、一向なんの用意もなし、こはいかなる心の息りにや
無常迅速なり、只今も知れず、死期の到來せし時いかんせんや、もし吾が言を
用ひて死の備をせんと欲せば何時にもあれ、只今命おはると思ひて萬事を放下
し、己が耳にきこふるほど高からず低からず南無阿彌陀佛と十念すべし、時と
所と不淨をえらばず唯わすれざるを第一とす、ゆめ〳〵おこたるべからず、建
保元年正月二十四日、等阿彌陀佛』かくて彼は翌二年四月八十三歳にて死す。
石堂丸は父苅萱の死期せまることを思つて信州に至ればそれは既に死して二
七日の後であつた。彼は高野山に歸らず父の殘した庵に住して毎日善光寺に詣
でゝ念佛を怠らず、父の三回忌にあたる日彼もまた地藏を彫刻して父苅萱の彫

刻した地藏と並べて安置す。時の人々これを親子地藏と呼ぶ。石堂丸は「よし
さらば吾れとはさゝじあま小舟みちびく汐の浪にまかせて」と詠ず。この年の
秋七月、彼は西にむかつて合掌して高らかに念佛を申して端然のまゝ俄然とし
て死す、時に六十五歳である。

日本

聖德太子

（一）

用明天皇第一の皇子を厩戸皇子といふ、或夜皇后が靈夢に金色の沙門忽然として現れて曰く『吾れ世を救ふの願あり、故にしばらく后の胎内に宿るべし』と皇后は大に驚いて『何人にてましますか』沙門『吾はこれ救世菩薩なり、家は西方にあり』皇后『妾が身は穢はし、いかでか貴人を宿しまつらんや』沙門『吾は更に穢れをいとはず、たゞ衆生を濟度せんと思ふのみ』と言ひおはつて皇后の口中に飛入ると見て夢さめる。まもなく懷胎して八月後にはその言聲が外に聞えると傳へらる。その後、敏達天皇即位元年正月元日、皇后は常よりも快くおぼえて數多の供を連れて宮中をめぐり、厩の前に到つて忽ち産氣ついて寢殿に入る隙もなくて安産あり、侍女ども周章狼狽して、誕生の皇子を取上げる。父君用明天皇は此時まで橘豐日尊と稱する皇子にてわたらせ、この事を聞

しめして產殿に入るに赤黃の光が殿內を照して異香が宮中に薰ずるを見て左右の侍臣に『この子は尋常のものに非ず、すみやかに湯あみさすべし』とのたまふ。敏達天皇にも殊更に叡慮うるはしく御寵愛あさからず。この御子の全身は香潔でその殿中に入る者は栴檀の林に入るごとく、また抱きたてまつる宮女はその匂ひが己が身にうつりて香氣やまず、宮女は爭つて皇子を抱く。厩の前にて降誕あつたに因んで厩戸皇子と稱したてまつる。

時に讃岐國より表を捧げて一の不思議な瓢を献ずる者がある、その表を見れば、同國羽香郡に縣主の物部兄麿といふ者があつてその庭の一株の椿の下に忽然として瓢の蔓が生じて次第に生長して花咲くも一つしかなく二つ咲かず、その一つが結んだ瓢が形大きくして壺に似る、瓢の腹には人の形が幾つもあらはれて其上に文字があり、見れば人の名でまた秦の字もある、猶ほ不思議なは長さ六尺ほどの蛇があらはれて蔓にまきついて瓢をまもる、冬となつても蔓は枯

れず、青々として一葉も落ちない、蛇も去らぬ、また兄麿の家に牝馬があつて孕むこと十二ヶ月にして先月師走十五日に子を產む、駒の頭は龍のごとく背に鱗あり、產れて乳を呑まず、庭に出て瓢の葉を食ひ、それを食ひつくすと蛇は瓢をはなれて去る、正月元旦に駒は瓢の蔓をくはひて兄麿の家に歸つて置き、空中に昇つて見えずなるとある。天皇それを御覽あつて『これ厩戸皇子の生誕する靈瑞ならん、急いで皇子に見せよ』とのたまふに即ち皇子の手に瓢を近寄せれば皇子は笑をふくんで握りしめ大手を開いて蔓をとらうとする、その手から何か落ちたを見れば瓢の種である。皇子が蔓をとつて引寄せようとすると蔓が蓋のごとくに離れて中から瓢のなかごが出る、それを見ると一つの種が拔出た跡があるので皇子の手から落ちた種を入れて見れば毫末の相違もない。

皇子はまだ四ヶ月でしかないのに能く物を言ひ、人事をさとる、二歲の二月二十五日佛涅槃にあたるの日には東にむかつて南無佛ととなへる、この時に一

方の右の手が開いて中から舍利一粒が落ちる。五歳の時から文筆書法を學ぶ、一たび筆を揮へば自然と筆法がそなはる、經典を敎へるに一度で記憶する、しかも字義をよく悟る。七歳の時に天皇に奏して『毎月六齊日は諸天國の政事を檢察す、乞ふ願くば天下をして殺生をなすこと停止せしめたし』と天皇よろしく聞召してその制を定めたまふ。十歳の時に蝦夷の國人が叛いて東國の地を侵して亂をなすこと邊境から早馬にて朝廷に注進ある。朝廷には群卿を召して蝦夷征討の評議をなしたまふ。厩戸皇子これを聞いて『小兒の身として國事を議せんこと、恐れあるに似たれども、もし天兵を下されて僅か千人二千人の首を斬り、一端は降參いたすとも年を經てはまた蜂起することあらん、また深く敵地に入つて蝦夷の種を盡さるゝ時は不仁にあたる、兒が意をもつて思ふに、如何にもして蝦夷の大將一兩人を召し寄せて敎諭を加へて重き盟をたてさせて本國に放ち歸して重く祿を賜りなば心から伏して永く背むくこと候ふまじ、萬一

召されて參らざる時に誅を加へらるゝも遲かるまじ』と奏す。天皇はなはだ感あつてやがて官兵を蝦夷へ遣して、大毛人綾糟を帝都に召して詔を下して諭す。綾糟は天恩のありがたきを感じ誓をたてゝ歸る。

皇子十一歳の時、二十四人の童子を後園に立たせて『汝ひとしく一齊に各自の思ふところを聞ふべし』と宣ふ。二十四人は一同に聲を長くし短くし心々思ひ〳〵に或は戲れ言、或は國家の政事、または經典の文句など勝手に難問したてまつるに皇子は一々それを聞き分けて、汝が言ふことはしか〴〵、彼の申すことはこれ〳〵とその尋ねることに答へて少しの誤りがないので、世の人は皇子を耳聰(みみさと)の聖德皇子と申す。敏達天皇十二年に群臣を召し集めて『いかなる計略をもつて新羅を亡して任那をたてんか』と勅問があつたが、それに答へる者がなかつた。厩戸皇子『承はるにいま百濟に達卒日羅といふ者あり、才智諸人にすぐれて兵を用ひること玄妙不思議の業なり、武勇も世に秀づ、この者を召

されて勅問あつて宜しからん』奏とするに、帝は物部守屋、蘇我馬子に仰せて勅書を作らしめて勅使を遣して百濟より日羅を招き寄せて大和の桑市に隱す。それは此時新羅から朝貢の使者が來てゐるので、それに知れてはと思つて使者の歸國するまで隱して置くのである。厩戸皇子は或日姿をやつして日羅を訪ふて相語るうちに『いま御身の面相を見るに人のため害されて非命の死をとげる色あり、宜しくつゝしむべし』とのたまふに日羅『臣幼年よりこの相あることを知る、更に死を顧みず、吉凶禍福は天より受け得たる數あり、伯夷叔齊がごとき賢人すら猶ほ餓死せり、況や某のたぐひの凡人なんぞ惜しむに足らず』と笑つて答へる。しかし皇子の豫言どほり、其の年のうちに百濟からの刺客に殺さる。

（二）

敏達天皇は十四年の秋に入つて崩御あり、厩戸皇子の父橘豐日尊を三十二代の天皇と奉る、これ用明天皇である。第二年の四月に用明天皇は俄の御不例にて次第に重らせたまふので厩戸皇子を皇太子に立てようとしたが堅く辭して受けぬので、先帝敏達天皇の第一の皇子押坂彦人大兄皇子をもつて、皇太子とする。用明天皇は勅して『朕平日三寶に歸依す、いま三寶に祈つて病平癒せばまづ〳〵三寶を尊信すべし、もしまた癒ずして死したらんには後世の冥福を蒙らんのみ、されば道德すぐれたる僧を請じて來るべし』と、このとき物部守屋、中臣勝海ひとしく進み出て『我國は神國なり、天皇かつて我國の神祇を祈りたまはず、何ぞ外國の邪法を信じて佛を拜したまふや、國津神への恐れあり』と奏す。天皇は敢て守屋、勝海の諫めを容れず、押坂彦人皇太子は豐國法師を玉體に近づけて祈らす。物部守屋は大に怒つて用明天皇の御弟穴穗部皇子をもつて天下の主となさすことを謀るに皇子は一議に及ばす同意する。遂に彼等は兵

を擧げて都は忽ち騷動の巷となる。蘇我馬子は中臣勝海を斬る。物部守屋は一味の中臣が斬られたので事成らずと見て降參す、馬子はその僞りであるを知つてわざと許す、こゝに於て和議なつて穴穗部皇子と物部守屋とは共に參內したので土下漸く安堵の思ひをする。

遂に用明天皇は崩御し、皇太子また次で御異例にわたらせて間もなく薨じたまふ。繼位が定まるまで先帝敏達天皇の皇后豐御食炊屋姬尊みづから大政をしろしめすを穴穗皇子は守屋としめし合せて馬子を亡し、炊屋姬尊を押込めて帝位にのぼることを企てる。馬子はそれを知つて彼等を討つてしまふ。守屋を討つ時には厩戸皇子も一方の大將となつて軍功があつたが、戰場に臨む時は戰場で自ら刻んだ四天王の像を頂髮の中に結び入れ、また諸軍にも四天王の像を描いた絹を甲冑に結びつけさせ、味方の勢が危く見えるや先陣に立つて『諸天大神祇まもらせたまはゞ四天王神のために寺塔を建立すべし』と祈願する。戰勝

の後に皇子は攝津國に四天王寺を建て、物部守屋の追福のために大和國飛鳥村に法隆寺を造立する。皇子一代のうちで出來た寺は四天王寺、法隆寺、元興寺、中宮寺、妙安寺、葛城寺その他すべて四十六ケ寺である。

かくて蘇我馬子の妹小姉君の生みたまふ泊瀨部皇子（欽明天皇第十二の皇子）を皇位につかせたまふ、崇峻天皇がこれである。在位五年の間は穩かであつたがどういふわけか天皇と馬子との中が惡くなつた。天皇は常に馬子を今のうちに討ち亡ぼさうと考へたが、威勢はなはだ盛んなため手を出しかねてゐる、一方にこのことを馬子に讒する者があるので、馬子は遂に刺客をおくつて天皇を弑したてまつる。有司百官も厩戸皇子も馬子の權威をおそれて彼の罪を責めることが出來ず、厩戸皇子はこれを前世の宿業と稱して無理に諦める。厩戸皇子はこの時すでに二十一歳となつたので皇位にすゝめたけれども承諾しないので炊屋姬尊を三十四代の帝とする、推古天皇がそれである。推古天皇は厩戸皇子

を皇太子となさうとするに辭退して受けなかつたが、勅詔三度に及んで仕方なく皇太子となつて萬機を攝政したまふ。世人これより聖德太子と申し奉る。

聖德太子は攝政となつて四海の民をめぐみて神祇を尊んで佛德を讃嘆する。同三年に高麗國の沙門惠慈が來朝したので師として佛敎を學ぶ。同五年に百濟國の王子阿佐が來朝して太子に謁して偈を說いて曰く「敬禮大悲觀音菩薩、妙敎流通東方日國、四十九歲傳燈演說、大慈大悲敬禮菩薩」云々、このとき太子の眉間から日光を放つ、阿佐は再拜して退く。前に推古天皇がまだ敏達天皇の皇后であつた時に皇女貝蛸姫をもつて太子の正妃とした、同六年に今度は膳大娘を外妃とする。同年四月に太子は諸國から名馬を求める、甲斐國より一匹の名馬を獻ず、一身が墨よりも黑く四肢はみな白し、この驪馬は神馬であるとて舍人調子麿に養はせる。秋九月に太子はこれに乘つて調子麿を具じて東國に赴かうと東に向ふや、馬は忽ち空にのぼり雲を踏んで暫くして富士山を過ぎて信

濃を經て越の白山に登る、山岳嶮岨を遙に見おろして四つの蹄は土を踏まず、恍惚として空中を行くがごとし。これによつて東國北國の地理、男女農業紡績の有樣を見て萬民稼穡の苦しみを察してまた諸國の嶮易あるひは調貢の遠近を知る。太子は都の四方四院に敬田院、施藥院、療病院、悲田院の四院を建てる。同九年太子三十歲の時に大和國斑鳩に宮を營み、こゝに移らせたまふ。

此時まで吾朝にはまだ曆法がなかつた、たゞ草木の花が散り葉の落ちるのを見て農業を營んでゐた。聖德太子はこゝに於て陽胡史王陳といふ者を選んで百濟へ遣して曆を作る術を習はした。王陳は百濟にゐること二年、沙門勸勒を師として學び、大略は知つたけれども猶ほその奧義をつくさないので勸勒を連れて歸朝した。太子は勸勒が獻じた曆書、天文地理の書を學んで遁甲方術の書までも一覽して勸勒でさへまだ解し得ないところを悟つて通達したので、勸勒は大に驚いて太子を敬禮した。これから曆法が初めて吾朝にも用ひられる。同十

一年十月に天皇は小墾田の地へ都を遷させたまふ。太子は三十二歳、また秦の河勝に命じて兵法を講ぜしめる、河勝は軍法十二道を編んでたてまつる。同年十二月、太子は奏聞して十二の冠階をさだめる、我國に於ける位階の初めである。同十二年には十七條の憲法をさだめる。同十四年七月、天皇は太子をして勝鬘經を講ぜしめる、太子は袈裟をかけて拂子をとつて獅子の坐にのぼつて經を講ずる、講がをはると天から蓮華が降る、天皇の叡感なゝめならず、即ちその地に伽藍を建てゝ橘寺といふ。同十月おなじく太子をして法華經を岡本宮で講ぜしめる、播州の莊田一萬畝をもつて施物とする、太子はそれを法隆寺の領にあてる。この年に諸國に命じて池を堀つて渠を開いて屯倉を置いて凶年の備へにする。同二十年に百濟から味摩之といふ者が來朝して吳國の舞樂を奏す、太子は吾朝の國人をして、それを習はしめる。同二十七年、太子四十八歳となり、畿内諸國に命じて國々に寺院を建立させ、寺地のないものには領地をたま

はり、材木のないものには材木をたまはる。竣功の報が國々からあるのを一々巡覽するとてかの驪駒に乘つて侍臣とともに諸國をめぐつて後に河内國科長に赴き、百濟から來た墓工をして墓を築かしめる。太子『わが命數は漸く盡き、世を去ること久しからず、墓の内には二の床を設け、一はわが床、一は妃の床なり』と一々指圖して斑鳩宮に歸る。

同二十九年太子五十歳、二月五日、晩に沐浴して妃にも沐浴させて新しき御衣を共に召しかへてやがて寢殿に入つて並んで臥す、かく翌朝に至るも二人とも起き出でたまはず、侍臣の人々は殿の御戸を開いて見るに太子も妃も眠るがごとく薨じさせたまふ。即ち太子が命じ置きたまへし墓に葬りたてまつる。五十日ばかり經て一の異鳥が飛び來つて御墓の上に棲んで去らず、形は鵠のごとく羽毛は白く、御墓を神妙にまもつて鳶鳥が供物を奪ひに來るを追ひ拂ふ、時の人これを守墓鳥といふ、三年の後いづこへか去る。

日本　聖德太子

支那

曇鸞大師

釋迦の入滅後一千四百二十五年、支那の後魏孝文帝の承明元年、山西大同府雁門に於て生る、これ釋曇鸞である、その家は五臺山の近邊にある。いまだ十五歲にならぬうちに五臺山にのぼつて文殊の淨土たる靈場をたづねて遺跡を拜して菩提心をおこして出家して修學にこゝろざす。內典外典、道書、儒書、天文地理をはじめとして廣く佛敎に通達し、別して四論の佛性に心をそゝぐ。一時大集經を讀んだけれどもその詞義が深密で世人が容易に開悟することができなからうと思つてその註釋にとりかゝつたが、中途で氣病をおこして筆をすゝめられず、止むなく筆を假にとゞめて醫療を加へて保養のために汾州秦陵の故墟に行つて城の東門に入つて天上を見ると忽然として天門が開けて六欲天の次第階位と上下重複とがありありと見えたので、からりと病氣がなほつたので再び大集經の註をつゞけようとしてつら〳〵思ふところあり、釋迦が四十九年三百六十餘會の說法、甚だ以て廣大多數のもの、その上に菩薩の論、人師の釋ま

ことに學ぶべき經論釋がなかなかに多い、しかるに此身はいつ息が絶えるかも知れぬは世の常のこと、あまねく經論を學んで解釋を成就しようとしても短命では耿目である、本草の諸經にはつぶさに正治の法を明にして長年の神仙は世間に往々ある、これは仙術を習つて長命不死の法を得たなら佛敎の註解も充分にできるだらうと、かく思ひたつて江南といふ地に陶隱居と名のる仙人があつて方術その妙をきはめて海内に崇敬されることを知つて其處に行つて仙術を學ぶことにした。

そこで北魏の地を去つて南朝の都に至つて時の帝に拜謁したいと申入れる、此時の南朝は梁の武帝の大通年中である。所司は北國の僧曇鸞と聞いて如何なる仔細かと疑つて種々吟味をしたが、怪しいところもないのでこの由を奏聞する、それは戰國のことであるから他國からの間者ではないかと疑つたのだ。帝は聞召して『これは決して國を覘ふものではない、重雲殿に入れろ』といふ。

この重雲殿といふのはその構造が複雜であつて門の數が二十餘もあり、千迷道とて甚だ迷ひまぎらはしい造りである。帝は先づ殿中の隅に於て繩牀に卻坐して袈裟をかけ納帽をかぶつてゐる、曇鸞は宮殿の前に至つたが、取次の者がゐない、傍を見ると高坐を構へて上に机を飾つてあるほかには坐がない、彼は進んでその上に昇つて佛性の義を立てること三度である。帝『大檀越佛性の義は深略にして疑あり』とて帽子をとつてしば〳〵問ふ、曇鸞はそれに一々答へる問答にやゝ時を移す。帝『今日は既に暮に及べり、明日また相見ゆべし』と曇鸞すなはち坐を下りて禮をしてしづ〳〵と立つて二十餘の門を誤り迷ふことなく出る。帝はこれを見て叡感あつて大に嘆稱して『そもこの千迷道は年久しく殿中に仕ふるものすら常に往還に迷ふ、彼法師はじめて來つて更に迷ふことがない、正しく凡人ではなからう』と頻に感心する。翌日は大極殿に迎へ入れて禮接を厚くして由つて來る理由を問ふ。曇鸞『野僧、佛法を學ばんと欲するに

年齢の短きを悲しむが故にはる〴〵と此國に來つて陶隱居に從つて仙術を求めようと思ふなり』帝『この仙は世を友とせざる隱遁者にして近頃數回呼べども來らず、心にまかせて方々に住す、尊師まづ書簡をもつて機嫌をたづね、而して後に行きたまへ』と、曇鸞は帝の命にしたがつて書をもつて彼を訪ふ。陶隱これに答へて『去月、耳に音聲を聞く、以辰、眼に文字を受く、まさに頂禮歳積による故に應眞來儀せしめんとす、正に爾り』と。曇鸞すなはち彼の山所に行くに、陶隱居はこれを請じ入れて大に悅び、仙經十卷をもつて遠く來るところの心に報いる。曇鸞はこれを受けて南朝への歸路について浙江を通らうとする。

こゝに鮑郎子神といふ神がゐて浙江に浪をおこすこと七日、曇鸞はその大浪の初日に逢つて渡ることができない、そこで神廟に行つて心をこらして祈り告げて『もし祈るところのごとくなれば必ず廟を再營して禮謝すべし』といふ、

暫くして江神が形をあらはして曇鸞に近づいて『貴僧もし渡らんと欲せば明朝を待ちたまへ、必ず穩ならしむべし』とこゝに於て曇鸞は翌朝になつて見るに浪がまだおさまらないけれども平然として舟に乘つて容易に渡る。かくて南朝の都に歸り武帝にその趣きを奏しのたので、武帝は叡感あつて勅して江神のため更に靈廟を建てる。かくて曇鸞は帝に暇を乞ふて南朝を立つて本國に歸り、北魏の境に至つて陶隱居が敎のごとく名山に入つて修行して、仙術を會得しようと思つて洛外をめぐつて勝地を選ぶ。折りから道でふと北天竺の乾陀會國の三藏薩菩留支に逢つたので、彼は持つてゐた仙經十卷を出して、目よりも高く差上げて『これは長生不死の仙經である、佛法の中に於て長生不死の法あつてこの上の仙術にまさるものあるか』と問ふ。このとき留支三藏は心に思ふやう長生不死の仙術を習ひ修して八苦充滿の世界に久しく生きながらへるのは色相輪廻の苦を受けるまでだ、決してそれは出離生死、頓證菩提の仙經ではない、

しかるにこの曇鸞は色相相續の仙經を至極のものゝやうに尊んでゐる、さても淺ましい人であるかなと大地に唾を吐いて懷中から觀無量壽經を出して『これはこの西天の大仙演說の長生不死の法である、これによつて修行すれば命に限りなき無量壽佛となる、たとへ仙術を學んで長生の法を得たりとも、暫くの間は死なずとも命には限りあつて終に死んで三有に轉生輪廻するのみ、あゝ愚かなり〳〵、こゝに心をひるがへして、吾敎にしたがつて當に生死を解脫すべし』と念佛の功德をくわしく語る。曇鸞は實に尤もと了解して念佛往生の深意を授かり、直に陶隱居から授かつた仙經を燒き捨てゝ、それからは四論を講說することを永くやめて念佛三昧の身となつて、讃阿彌陀佛の偈を造つて安養淨土の依正二報の功德をあらはし、天親菩薩の往生論に註解をなした。

魏の帝王は曇鸞大師をあがめて神鸞と名づけて勅を下して幷州の大嚴寺に住せしめ、その後は汾州北山石壁の玄忠寺に移らしむ。彼は介山の蔭にあつて徒

を集めて淨業をすゝめる、いま鸞公巖といふのがそれである。魏の興和四年に死す、六十七歲、臨終の時に虛空より花降り幡天蓋など寺堂の軒を覆ひ、香氣四面に薰じ、音樂の聲きこえて寺に登る數多の衆人みなこれを見聞したと傳へらる。事の由を帝に奏聞すれば勅して汾西秦陵の文谷に葬つて靈廟を建て並に石碑を設けて大師の德を錄していま猶ほ存すといふ。

日本

役行者神變菩薩

（一）

大和國葛木上郡茅原鄕の賀茂役公氏に一人の娘があつて幼少の時から父母に孝に容貌は美しく紡績の業もつたなからず、心ざま優しくて糸竹の道もくらからず、たぐひなき娘なので遠近から妻に迎へたいといふ者が多いけれども敢て承けず、常に神佛を信じて五辛酒肉の類をきらつて精進潔齋して比丘尼のやうな行をしてゐるのでそれを惡くいふ人々もある。舒明天皇の五年三月のこと、帝が御遊獵の道に茅原鄕を過ぎて鄕人はみな出でゝ拜む、この事のあつた後に彼女の體に變りがあるので兩親が心配して尋ねると『或夜の夢に一つの獨股杵(しゃ)が天降つて口中に入ると見て醒めた、怪しい夢に他言もできずそのまゝにしてゐる內に腹中おだやかでなく、月のさわも滯り心がゝりである』と語る。兩親は驚いて、かねて聞き及ぶに天竺の摩耶夫人は佛體が口中に入ると夢を見て釋

奠を産みたまふたとある、賤しい身にはくらべ難いけれど佛が宿りたまふたのではないかと悦ぶこと限りなく、村人なども洩れ聞いて噂し合ふ。中にも物知り顔の老人は手を組んで深く考へ『唐土にては國王の后が炎暑をしのがうと鐵の柱に身をよせて遂に孕んで鐵丸を産み、これで二振の劒を造つたといふ。また近江國に一人の若い女があつて癪の持病に常に按腹して快く思つてゐるうちに常ならぬ身となつて人の手を産んだといふ例もある。かれこれを思あはせれば獨股杵(しよ)でも産むのではないか』と言ふものもある。

彼女は十ケ月になるけれどもまだ産れる樣子もない、明くれば御代六年正月元日に産氣づいて安々と男子を産む。産れた子供は凡兒にあらず額に一角を生じて面貌魁偉にして常體と異なる、よつて幼名を小角と名づける。三四歳の頃から歩行するに地に這ふ虫を踏まず、花を摘み果實を拾つて佛に供養し、常に魚鳥の肉も五辛の類も食はず、遊ぶに子供を相手にせず、伯父の願行といふ者

に就て學をまなぶに一遍でおぼえ込む。七歳の頃から慈救の咒文をとなへることと日々十萬遍にあまり、敎へられなくて自ら密來を悟つて常に孔雀明王の咒を誦し、村人との交際を斷つて少しも怠ることなく修行する。雨の中を歩いて着物を濕らさない、額に帽子をあて丶角を隠す、世の人これを角帽子といふ。下駄をはいて不淨を踏まず、錫杖を振つて虫を追はず、頂髪を剃らないけれども北丘僧の威儀のごとく肉食せず、五辛を口にせず、酒を飲まず婬欲をしりぞけ不淨の家で食をしない。女が男に合はずして子を産むとは不思議であるが、或は舒明天皇が茅原郷に行幸あつた時に御寵を受けたのを人に隠して獨股杵が口中に入つたなど丶披露したものであらうか。

かくて彼は修行を怠らず年をかさねて今は天眼通を得て居ながらにして百里の外を知り心中の善惡を見ぬき、また病症を見ること老醫も及ばず、されど村の人々は却てこれを謗つて母親とおなじ拗者(すね)として信用する者がない。同村に

作麿といふ年の頃は二十三四歳で力が強く相撲を好んで力だめしに勝つて慢心して村人を眼下に見くだす傍若無人の無頼漢がある。誰も敵するものがないのをよいことにして大酒を呑んでは喧嘩を吹きかけて非道の振舞をして人をなやまして樂しみとする。或時大に醉拂つてたゞ一人夜更けに山路を歸つて來る、月が冴えて晝のごとく、一疋の狐を見つけて殺して食はうと思つて石を投げつける、狐は尾のさきを打たれて危いところを逃げ去らうとする、作麿は殘念だと追つかけること三丁ばかり、狐は高い岩の上に飛びあがつて作麿をかへり見る、その眼光かゞやいて尋常の狐にあらず、作麿は少しも恐れる色なくまたも石をとつて投けつけようとする、狐はこんこんと泣いて遙の谷へ飛んで姿を消してしまふ、作麿は腹をたてゝ『さてもさても命冥加な狐ぢやわい』とつぶやきながら吾家に歸つて寢る。翌朝になつて作麿が起きて來ないので父親が『おい、作麿、起きぬか、いつも喰ひ醉ひやがつて朝寢するとは、今日は田植ぢや、

さあ、起きろ』とどなる。作麿は起きあがつて走り出で上座について父にむかつて大音聲に『汝よつく聞け、作麿は僅な力をたのみにして喧嘩を好み非道の振舞すくなからず、種々の惡業つねに憎しと思へども吾れにかゝはらぬこどなれば是れまでは許して置きたれど昨夜われに石を投げ、いま五寸高ければ陰囊にあたつて死すべきに尾先きにそれの危きを免れたは吾が高運といふべきである、年ふる間には獵人に追はれまた或時は矢にあたり樣々な危難にあつて逃れ得て百三十年の功をつみ、大和國に於ては恐れるものなく多くの眷屬もあり、狐の中の定めとして五十歳にしてよく變化し、百歳にして美女と化して人の交りをなし、千歳にして天にのぼつて神に仕へて天狐といはれる身となるもの、しかるに作麿などに打たれたること眷屬どもへも恥づべきこと、暫くこの家にとゞまつて汝等をなやまして樂しまうと思ふのだ、子の惡事は親これを知らずと言へども、たゞ一人の男兒なればとて幼きより子の云ふまゝに育てゝ人の道

を教へず、子の惡業は親の罪、免れることはできぬ』と宣す。

自辭狐の辯口にいづれも互に顏を見合せて貴人の前にゐるごとくに首を下げて閉口するに作麼はなほ進み出て席を打つて曰く『先づ今日のもてなしには眷屬どもゝ澤山あるから米三斗を赤飯として隨分と小豆を多く入れ、生魚をそなへて出せよ』といふ。いよいよ狐が作麼に憑いたことを知つて村中寄合つて相談する、なんとしても先づまづと米三斗を赤飯として生魚をそなへて作麼の前にさし出せば『これは吾が食ふのではなくて眷族どもへ遣はすのぢや、早々谷間へ持つて行き、清淨な所に置け』とのことに山中に捨てる、其日はそれで鎭まる。翌日も早朝から油揚の餅三百、小豆餅五百ばかり註文する、父は大に當惑して『毎日こんなに御馳走してはこの痩身代はたちまち潰れてしまふ、しかし今日かぎり退散するならおまなかひしてもよし』と言へば作麼は『よしよし如何にも退くべし』と答へるに近所の人々をたのんで餅をつくやら油屋へ駈け

つけるやら日暮れ方に漸く品々をとゝのへて昨日のやうに谷へ持つて行き『さあ約束のとほりにしたから退散するかどうか』と伺ひたてれば作麼は大に立腹して『親として子を追出さんとならば行先のあてはなけれど何國へなりと出て行くべし』と走り出すに親はあはてゝ引止め『お前に出て行けといふのではない、お狐さまに言つたのぢや』と言ふ。作麼はそれをよいことにして益々いろいろの好みをなし、それを調達しなければ荒れ廻る、力は日頃に十倍してなかなか押へることもできず、村中が寄つて談合して呪ひの祈禱はいふに及ばず老若男女の差別なく智惠袋の底をたゝいて力をつくせど、何んの甲斐もない。中に一人がきつと思ひついて『役の優婆塞は世の中の拗者にて人まじはりさへせぬが、近頃は不思議なことが多い、あの男に賴んで祈禱してもらつてはどうぢや』といふ、他の一人『さうぢやさうぢや近頃河內國から眼病の者が來て加持祈禱してもらつたら七日のうちに手の筋が見えるやうになつた、また津國から

若い女が來て何の病氣かしらぬが、これもなほつた、いま一人は都の人で十年この方の病それもなほつた』また他の一人『おやおやそれは燈臺もとくらしか』更に別の一人『なんにも謝禮をとらぬさうぢや』と言ひはやす。そこで申合せて四五人が役行者に賴み行くに役行者はよしよしと承知する。彼は白妙の淨衣をつけ顏に角帽子をあて木履をはいて左には獨股杵を持つて右には錫杖を振つて作麿の家に入らうとすれば作麿は大に驚いて臥戸の中に走り込んで堅く戸を閉ぢて身をかゞめて『暫くどうか行者の御入りを留めてくれ』と言ふ。行者は室前に立つて『言ふことがあつたら言ひ置いて立ち去れ、願ひによつては少しの猶豫を與へるぞ』といふ。作麿『長くこの家をなやまさうと思つたのに行者の御入りとあれば片時もとゞまることができない、今からすぐに退散する、吾は百三十年のそのあひだ道をくらまし人を迷はし、また或時は異類異形に身を變じて婦女を驚かして千變萬化してもまだ人の身にとりついたことはない、作

麿は常に惡業をなすゆえ神佛の守りなく、吾れまた彼れを憎しと思つて取りついて惱ますのだ、けれども行者が來たまふのを見れば恐しくて留つてゐることができない』と今度は村の人々にむかつて『汝等は行者の呪力を知らずに却てその行をそしつて世の拗者と言ふは愚かなことだ、吾は畜生だけれど通力があるから行者の尊いことを知つてゐる、いま立ち退くに就ては汝等がために行者の功德を言ひきかさう、謹んでよつく承はれ、そもそも役の優婆塞の行者は七生のその昔から佛であつていまこの里に生れたまふは忝くも天子の御落胤なるによつて、衆生を化度したまはんために佛の御靈をさづかりたまふゆえ凡人ではないぞ』と言ふや、作麿はそのまゝ倒れ臥して死んだものゝやうになつて眠る。村人は大に驚いて役行者を伏し拜んでこの噂は四方にひろまる。

（二）

河内國倉造に勸意といふ長者が住む。その一子に善見とよぶ男があつて行狀だゞしく二十三歳となつて美男なれば懸想する女も多い。こゝに善見の側女に名を阿古とてまめ〳〵しき女がゐる、同村の百姓の娘で幼にして父母にわかれて頼みなき身なので勸意が不憫におもつて十一歳の頃から引取つて養ひ育て、鄙に生れて稀れに優しい心だてゆえ側近く召仕へさせる、今年二十三歳になつて蔭ひなたなく仕へるに勸意も可愛いがり、善見がまだ妻のないので側なることをまかなはせる。善見は彼女が慇懃に怠りなく仕へるその實體なるを深く感じて愛するので女もまた情の深い善見の心をよろこび互に愛し合ふ夜がかさなつて百夜におよべども慎しみぶかい彼女のことゆえ悟る者もなかつた。彼は彼女を妻にしたいと思へども下女のことなれば父もゆるすまじ、親類縁者にも憚りあり、これは忍びて長く召使へるほかに道なしと、諸方から妻帶をすゝめてもみんな事を左右に托して承知せず、父の勸意も忍び女のあるとは夢にも氣つか

ず早くしかるべき縁をもとめて家督をゆづらうものといろいろに心を勞す。ここに同村に勸意の家に次ぐ長者あつてそこの一人娘を子良司（こらし）と呼んで艶なることと限りなくて兩親は手の中の玉のごとくに寵愛して藝を敎へ行儀をたゞして養育もする、勸意はこれに目をつけて人をもつて内意を問はせれば早速相談に及びたいとのことに勸意は直に媒酌人をもつて申入れる、また善見にもこの事を告げる。善見は心中おもしろからず、氣もすゝまぬけれど父の意にてむきかねる。やがてその日になつて何かと家中は賑はしく、阿古は己が身の賤しきをかへりみて嫉妬心もなく働く、日暮もちかづき、善見は衣服をあらためて媒酌人と連立つて祝ひのために女の家に行く、阿古は善見が寢間にぬぎすてゝあつた衣類をたゝみなどしてゐる。善見は滯りなく婚姻をとゝのへて次の日は吾家に歸つて女はその翌日善見が方へ來て舅觀意その他の盃を請けおさめて萬事をすましてを日をかさねる。善見は阿古を可哀さうに思つてわざと側近く召しよせて

何かと事をとりはからはせて阿古の心をなだめる。子良司は更にそんなことゝは知らず、たゞ召仕女と思つて善見にみならつて、阿古を呼んで用をかなはせる。

さても阿古は如何なる因縁にやかゝる憂目にあふことかな、在りて甲斐なき世の中に長らへんより淵川に身をしづめてなりと日毎に見る目の苦しみを免れようと既に覺悟をきはめて忍び出ようとするところへ善見が呼びとめるのに氣をとりなほして行つて見れば、さしたる用にもあらざるに近寄せて言葉やさしくなだめられては迫りし胸も少しく開いてそのまゝに心もとけて日を過す、かくすること幾度もかさなりてその念の晴れることがない。しかるに子良司はいつしか重い病に臥して醫療を加へるけれどもその驗もなく、日をかさねるうちに面部に惡瘡を生じて鬼女のごとくに變じて面立は次第に崩れるばかり、神佛に祈つても甲斐なく、一門のこらず集會して評議する。中に大和國茅原郷に役

の優婆塞とて死人をも蘇生させる行者のあることを語る者あり、早速その行者のもとへ子良司を連れて頼み入る。役行者曰く『この病は身から生じたのではない、怨靈のなすところである、これをもつて洗へば治すること疑ひなし』と加持水を與へ『これでなほつてもまた他に惡瘡が生じればそれは身から出たものだ』と敎へる。家に歸つて洗へば書いたものを消すやうに日々に薄くなつて七日にして消え失せる。ところが今度は阿古の面が色づいて痒きことかぎりなく、それを掻き破れば子良司の惡瘡のやうな惡瘡となる、こゝに於て子良司の惡瘡は阿古の怨靈であることがわかる。阿古は重い病となつて今は死を待つよりほかになし。善見は心に考へるに、阿古が子良司をそんなに怨むとは思はれない、しかるに阿古がこんなになるのはこれは行者の方便であらう、子良司は父母のゆるした本妻である、阿古はたとへ深い仲でも忍女である、少しでも子良司を怨むのは道理にあらず、その根元はみんな吾心から出るのであれば、二

人の女をなやますのは悉く吾身の罪であると、これから父母をはじめ一門の人々に阿古と密通してゐたことを懺悔して猶ほ子良司にも言ひきかせて急ぎ茅原郷に行つて包まず行者へ申上げて我身に惡病をうけるとも阿古の病苦をすくひたきよしを願ふに、行者は懺悔したのを感心してまた加治水を與へる。善見はそれを以て阿古の面を洗へば七日にして同じく全快する。阿古は行者の靈驗に心もくだけてその有難さを尊みかしこみ、黒髪を切つて尼となつて行者が登山の後はその母に仕へる。

同國高市郡に老いた親に一人の娘があつて獨娘として我儘一ぱいに育たので長じても氣隨氣まゝに兩親をないがしろにして酒を好み淫奔で、その容貌は朱の丸盆のやうな顔に聲は銅羅のごとく、恐ろしく醜いため人にきらはれる、二十三四歳になつても男から惚れられたこともなく、戯れに男が忍び入れば悦ぶことかぎりなき惡女の深なさけ、男はもとより慰みなれば三四回の後はもう姿

を見せぬ、女は自分が醜いので他の女に見かへられたのだと思つて文など男に送り、また或時は媒人をたのんで招くけれども更に男は來らず、女は大に怒つて自ら行つて尋ねるに夜は逢ふことができぬので白晝に押しかけて男の襟首をとつて引返してさん〳〵に罵つて『私の姿が醜いのは最初から知つてのこと、いまさらほかに見かへるとは、さあ私の方へ入聟するか、それとも私を娶るか二つに一つの返事をしろ』と言ひこらせば、男は驚き恐つて言葉なく、やうやう本人をなだめてその場はどうにか逃れても絶縁することかなはず、是非なく妻に迎へたれど、女は常に不淨をいとはず、神佛を尊むことなく、心のまゝにおこなつてゐる。男は近所の人々に誘はれて茅原の役行者に參詣するとて前夜から仕度するに、女はつぶやいて『用もない物參り、何の役にたつものか』と言ひながら着物をいぢるを、男は押しとゞめて『これお前は月水のけがれがある、行者詣には忌み事だ、必ず手をさわつてはならぬ』と言へば女は腹をたて

『さてもさても面倒な行者だ』と男の制するのも聞かずに着物や辨當などをとのへる。男は氣色あしくは思へども約束あれば早朝から茅原郷へ行く。途中から足が痛んで行くことならず、僅の道に事いぶかしや、これは定めし行者のたゝりであらうと心づき、連れの者にわけを語つて家に歸り『貴樣のために行者の罰を受けたぞ』と罵りながら家に入れば、家内大に騒がしく、女が例の大聲にて叫んでゐるので男はいよ〳〵怒つて『けふと云ふけふは勘忍ならぬぞ』と言つて奥を見るに親類縁者をはじめ近所の人々が多勢よつてたかつて女をとりかこんである、その人々を押しのけて、女を懲さうとすれば人々が言ふやう『今日はいつもの氣儘ぢやない、亂心のていぢや』とのこと男は『日頃から神を神とも佛を佛とも思はず、不淨の身をもつて私の茅原參りを邪魔だてしたから罰があたつたのぢや』と言ふや、女はその言葉を聞いて兩手をつかへて頭を下げる。男は『世の常の女なら斯うあるべきだが、五年このかた一度も私に頭

を下げたことのないこの女が今日はじめてのこの有樣、さては亂心したのか』と怒りをしづめるに、女は急に頭を下げて踊り出して大聲あげて自分の罪を觸れ歩くので、村人は庄屋に集つて『これは行者の罰にちがひない』と川邊に出て潔齋して茅原郷に行つて斯く〳〵しか〳〵の由を述べて御免をねがふ。行者は『女の月水の穢れが去つてから連れ來れ』といふに村人は女の穢の清まるのを待つて齋戒沐浴させて行者のもとへ連れ來る。行者は獨股杵をさゝげて神を拜して次の頭上にいたゞかせれば女は忽ち色を變じて口を閉ぢ、それから本心に立ち返り、村人から行者のことを聞かされて悔い改めて信仰堅固の身となつて良人におとなしく仕へるやうになつた。

（四）

大職冠鎌足が難病にかゝつて如何なる醫藥治療もその功なく、神に祈り佛に

念じても驗しなし。このよし叡聞に達して群臣を集めて評議あり、茅原郷へ勅使を下して役行者にたのみ入る。行者が即時に祈念すれば日をかさねずして快方におもむき、三七日にして全快する。これによつて帝は行者の咒驗を感じて行者に高位をたまふべく勅命をくだして急ぎ參内するやう仰せわたさる。行者はこれを悅ばずして『吾が咒力をもつて病はなほれども、その以前より百濟の法明が維摩經を誦ずることも力あり、これより維摩經を深く信じたまはゞそ建驗あるべし、吾れは高位高官をのぞまずまた財寶を好まず、一切衆生を化度せんことをねがふ』と辭して參内しない。鎌足は行者の敎へをまもつて一宇を建立して山階寺と號し、毎年十月に維摩會を行ふ。後に大和國高市郡厩坂に移して厩坂寺と呼び、和銅三年に春日の地に再び移して興福寺と改稱す。

天智天皇四年、行者の年三十二歳、眼前の衆生を救うのみにあらず末世强剛の衆生を化度するには在家の修行では滿足できない、深山幽谷に入つて修行し

ようと清淨の地をえらむ。齊明天皇元年五月、葛城嶽から龍に乘つて飛出すものがあつてその容貌は唐人に似て油衣の笠をかむつて虛空をかけつて膽駒山に行き、午の刻には住吉の松の峰にとまつてそれから西方に飛び去つて行方を知らず、見る者が奇異の思ひをして帝へ奏したてまつる。役行者は葛城山またの名は金剛山に登らうと思立つて母にむかつて『末世の衆生を化度するために葛城山に入ることをゆるしてもらひたい』と暇を乞ふ、母『いまは既に三十二年の功をつみて艱苦の人を救ふこと幾千人とも知れず、上一人より下萬民の敬をうけて身に足ならぬことなく、たとへ末世のためなればとて一人の親を捨てゝ山に入つては神佛の御心にもかなふまじ、たゞ一人の男を何とて山に捨つべきか』と更にゆるさず、行者『仰せはさることながら佛祖釋尊も出家の御發心の例もある、修行の功をつめば母君への孝ともなる』母『どうか思ひとまつてくれよ』と聞き入れる樣子なし。行者は此上は忍び出るほかなしと心をさだめて

母への遺物として己が木像を刻んで母に見せる、母はよく似たりと悦ぶ、夜に入つて仕度をする、白栲の衣を着て木履をはく、木履の齒の高さ一尺二寸、手に持つ錫杖の頭に五つの角あつて地水火風空の五體を表し、四つの鐶は須彌の四州、二つの鐶は陰陽である、右の六つの鐶は六根、左の六つの鐶は六塵、これを觸る音は六根清淨、頭には角帽子、手には獨股杵、錫杖、足には木履、そのほかには無し。彼は自作の木像を殘して夜中ひそかに金剛山へと急ぐ。このこと叡聞に達して行者の家の村に一宇を建立して茅原山金剛壽院吉祥草寺と號して行者遺作の木像を安置する。

役行者は頭に角帽子をあて白栲の衣をきて高足駄をはき、右の手に錫杖をつきて左の手に獨股杵を持つて山に登る。峨々たる岩上には苔なめらかにして足をとゞめず、松柏繁茂して甚だ暗く、荊棘道を埋め、蔦葛にとりついて漸く山の八合目にいたる時、俄に山中鳴動して大石を投げ古木を倒し山も崩れるごと

き音はすれども目には見えず、行者は大に驚いて山神のたゝりなるか、天狗などの仕業なるかと錫杖を岩角に突きたてゝ暫くとゞまつて遙に峰の方を見上げれば岩の上に立つてゐるものあり、身のたけ丈餘にして面體は赤くして兩眼は鏡のごとく、髭髯は多くして短く、髮は亂れて身には皮衣を着し、履をはいて手にはいかめしい鉾を持つて大音聲に『不淨千萬の身として清淨堅固のこの山へ登らうとするは難し、早や歸れ』と呼ぶ、行者は怒つて曰く『吾れ幼きより五辛肉を食はず、常に孔雀明王の咒を誦し、心に欲することなく、精進潔齋の身なり、神ならば知りたまふべし、汝かならず鬼魔の類ならん』と錫杖をとつて薙ぎはらへば惡鬼は忽ち鉾を擧げて進み寄り、互に一上一下と鬪ふ、戰ひ數刻にして惡鬼は力およばず鉾を捨てゝ逃げ出す、行者は追ふこと三段ばかりで遂に姿を見失ふ。次には谷間から黑氣が吹出して道をふさいで進むことができず、なほそのうちに夥しく惡鬼があらはれ出でゝ弓矢あるひは鉾や鐵槌や斧な

どをさしかざして待ち受ける、行者は呪力をあらはして獨股杵を投げつければ黒氣がたちまち晴れてあまたの惡鬼が消え失せる。また登ること一丁ばかりで大蛇が道によこたはつて首と尾とは見えない、それほど長い、行者が飛び越えようとすると木の梢に光るものがあつてそれは大蛇の目玉だ、口をばつくり開いて火焔を吹いて行者を頭から丸呑みにしようとする、行者は不動威怒王の呪文をとなへて錫杖をふり上げて大蛇の胴をかちんと打つ、大蛇は二つに切れて左右の谷へ落ちる。かくして漸く山嶺に登りついて曉の東天にむかつて日の出を拜し、そこに草庵をむすんで住して常に孔雀明王の呪、不動威怒王の眞言を誦して修行おこたりなし。

或時に美女が來て首を下げて禮拜して『私は麓の里に住む女なるが、子供のころに母にわかれて繼母のために苦しめられ、命を捨てようと思ふこと幾度といふことなし、されど父が世にましますす、私のなき後はさぞや歎きたまふらん

と彼れを思ひこれを思つて死期をのばすこと三年、繼母の慳貪邪見をどうしても見るにしのびず、尼になつて佛の道に入らばやと思ひはべれど師とたのむべき方もなく、行者にねがひ申さんと思ひしに、この山に登りたまひしと聞いた悲しさ、女人禁制の山なれば力およばず憂きことになん思ひはべりてあけるに、私の誠心が天に通じてか、神佛が憐れみたまひてか、昨夜忽然として一人の翁が現れて私の手をとつて立ちたまふまで覺えしが、その後は更におぼえなし、行者よ、なにとぞ師弟の約をむすばせて五障三從の身を救ひたまへかし』と男の心をとろかすほどの媚をふくんで迫り來る。行者は惡鬼の變化であることを看破して言葉も出さず知らぬ顔して行ひすます、女はますます淫美をよそほつて肉迫する、行者は獨股杵を美女の眉間に投げつける、忽ち鬼類の本相をあらはして逃出す。行者はこの山の山神一言主之神の出現を祈る。夜も深更におよんで草庵にまたも一女があらはれる、長い緋の袴をはいて頭には玉をもつ

て飾つた冠をかむり、檜扇で面をかくす、その樣は皇后のいでたちに異ならず行者は『いかなる人にましますか』と問ふ、女『吾は一言主之神なり、行者の勇猛精進を感じていまこゝに現る、當山は清淨堅固の地にして上古より諸神の天降りたまふことも多く、また法起菩薩が常にあまたの比丘僧を集めて毎日說法したまふ、これをも聽問していよいよ行ひ正しく懈怠なくば持明仙となつて通力自在の身とならん』と言つて幽谷に姿を消す。

行者は法起菩薩の淨土に至らんことを願つて怠りなく修行する。或時はるかに鷄稚の聲がきこえるので山に深く入ると三千餘の床に大比丘僧が列座して布薩を行つて籌をひく、行者も籌をとつて衆にまじる、その威儀まことに嚴肅である。また南方に法華經を讀誦する聲がする、その方へたづねて行けば巖石峨峨として石窟重疊、三千餘人の仙衆が洞穴の中に住む。猶ほ東方に鐘の音がある、こゝに鬼王があらはれる、行者『この鐘は何んだ』鬼『法會の時がもう來

たから集會の鐘を鳴らすのだ』行者『法會とは何か』鬼王『華嚴の法會である』行者『それを聽問してもよいか』鬼王『容易ならずと雖も御志深いから引導してやらう、吾がいふやうに印明を結誦したまへ』と秘印の法を授ける。行者はその如くにして一たん閉ぢて眼を開くと、山は廣博、嚴淨、微妙の淨土となり七寶の宮殿が軒をならべて金繩が道を界へし、中に法起菩薩が座す、四邊に床があて大比丘僧三千餘人が列座す。またそのほかに金銀珠玉の床があつて或は錦繡を敷き、或は虎豹の皮を敷いて、二の座の上に神仙、龍王、夜叉、羅刹など列座して各々菩薩の說法を聽聞す。佛は虛空に住して菩薩の頂を撫でて授記すれば菩薩は敎勅を受けて大衆を敎化す。天鼓、伎樂が苦空無我の曲をくらべて風の聲が寶鐸にひびき、實相圓融の妙理を說く。後には高山が聳へる。これは靈鷲山である、前には八功德の池があつて五色の蓮華が芥蔕として盈滿す、天よりは微妙の香花が降つて異香まことに郁然、光明は照耀して月の光に越え

る。行者はこの淨土にあつて佛を見て法を聞き宿住智を得て歡喜す。

（四）

行者は或時北方にあたつて靈氣がのぼつて天に通ずるのを見て、その方に菩薩の淨土があることを知つて山を下つて氣をしたつて攝州に赴き、山中に分け入つて箕面にいたる。川を渡つて流神にさからつて登つて見れば一つの瀧がある。高さ二十餘丈にして當山第一の大瀧で第二の瓔珞の瀧と號し、第三を奥の瀧といふ。第一の大瀧の底には黒龍が住んで瀧の邊に全身をあらはしてわだかまる、その長さ三丈にあまる、兩眼はみがいた王のごとく紅の舌をひるがへして鹿の角のごとき角を振りたてる。行者は錫杖を振つてすゝめば黒龍は動くことができず、行者は龍の體を木石のごとく心得て攀ぢのぼる。瀧の上に一つの松があつて梢に光明を放つものがあつて落ちて行者の袖にとまる、見れば三股

杵である、後世この松を三股の松といふ、行者はそれをとつて瀧の上の石上に座して前の石に錫杖を立てゝ秘呪を誦す。登山して三十日目の四月十七日の夜に夢を見る、利劍を編んで夜として長繩を腰につけて三股の松の邊にある龍穴に入ること凡そ一里ばかりで城廓があつて石門をかたくとざしてゐる、中から伎樂の響きが微に聞える、行者は門前にひざまづいて眞言を念誦すれば門内に聲があつて『門外に呪を誦する者は誰か』行者『日本の役優婆塞の行者である問ふ者は誰れだ』聲『吾は德善大王だ』と直に門を開いて行者を入れる、重門高樓は甍をならべてみな七寶を莊嚴し、黄金臺、玉の階、寶の池、優盌羅花、拘物頭花の奇香は馥郁として琪樹が立ちならび、靈禽異鳥が和雅の音を發して妙法をさへづる、寶憧、幡蓋は薫風に飄々とし、摩尼の燈火は光明爍灼で、甘露醍醐の妙飲食は寶器に山と積み、殿前には丈餘の錫杖が立つて時いたれば振らなくても鳴る、正面には丈餘の鼓磬をかけて刻限には打たなくても妙音を發

する、菩薩、聖衆、天人、龍鬼などが其中に充滿して中央の宮殿に七寶莊嚴の床があつて其上に龍樹菩薩と大辨財天女とが座してゐる、德善大王が佛前にすすんで香水をとつて行者の頂上にそゝいで『汝、本所に歸つて心まかせに興隆しろ』と言つて秘法を傳へる、行者の身心爽快となつて水上に浮びのぼるやうな氣持になると見て夢がさめた。行者は瀧の下の西側に荊棘を刈拂つて巖をひらいて草堂を構へ、龍樹菩薩と辨財天女との像を等身大に造つて安置する。次に德善大王、十五金剛童子などの護法神のために堂の東北に小祠を建てる。當山の瀧が落合つて流れる有樣が箕に似てゐるので箕面山瀧安寺吉祥院と號す。

晝は瀧の上にあつて孔雀明王の呪を誦し、夜は瀧の下にあつて大聖不動明王の呪を誦して修行する。矜伽羅制多迦の二童子、八部衆などが彼に給仕する。座禪石から天に上ること心のまゝなればとて後世こゝを天上ケ獄といふ。彼は嶮難の地を見たてゝ道を踏み分け山を開いて末世の行場にしようと思ひ、座禪

石を離れて錫杖をつき高足駄をはいて山を下る、山中鳴動して一の大岩が道の眞中に湧き出る、それを飛び越えて麓に下る。瀧水は湧き出た石にせかれて淵となつて黑龍がわたかまる、これ山神が別れを惜しんでのことであらうと長さ二尺の木像を作つて草堂をたてゝ其内におさめる、溢れた水が瀧を流れに入つて黑龍も姿をかくす。彼は大和に向ひて平群郡にある生駒山に登り、般若靈窟に入つて秘密の呪を誦す。或時鬼のごときもの二つ近寄る、根引の松をもつて左右から彼に打つてかゝる、彼は錫杖をあげて拂ひのける、鬼が逃げ去るのを追つかけて捕ふ。このところ後に寺を建てゝ藥師如來を本尊として鬼取山鶴林寺と號す。行者は二鬼に『汝等はどこの者か』と、二鬼は頭を下げて『私共は麓の里に產れて幼にして父母に放れて敎へるものなく心のまゝに生長するに從つて力が强く、深山幽谷に入つて猛獸を狩ることを樂しみとする、そのため里人がまじはることを嫌つて鬼となし、自分達もまた鬼の心となつて魔道の修行

を成就して諸山の峰にのぼつて征服し、今は多くの眷屬があつてこの般若窟も自分達のものとしゐるのに行者に占領されたので斯は無禮をいたしたり、ゆるさせたまへ』と、本相をあらはせば身長は丈餘で左右に牙を生ず。行者は鬼神の心をやわらげて善道にみちびく。この兩鬼を義覺と義玄と稱す、彼等は行者をみちびいて鳴川山にのぼる。行者は山の絶頂にあつて眞言の密法を誦して一千日、時に岩間から光明赫々として千手觀音が出現する、彼は勸喜して尊像をきざんで安置してそれを千光寺と號す。

行者は義覺と義玄とを驅して鳴川山を下つて六田の鄕に行き、吉野川を渡つて荊棘を踏み分けて登ること三十餘町、これを金峰山といふ、山神の出現を祈つて船若心經を誦し、一七日に及ぶ。地藏菩薩があらはれる、けれどその相あまりに柔軟にして末世强剛の衆生を化度することはむづかしいとて行者は地藏を遙の谷に投げる、後世この川上の莊、神の谷村に地藏菩薩を本尊とする妹背

山高剛寺を建てゝ俗に抛地藏といひ傳ふ。行者また心經を誦す三七日にして彌勒菩薩が出現する、これも心にかなはずとて抛げる。それから一千日の修行で藏王權現があらはれる、その相は靑黑の忿怒にして左手に劒印をむすびて腰をおさへ、右手に三股杵をとつて巖窟から出て『むかし靈山にあつて妙法を說きいま金峰山に金剛藏王の身と現ず』と虛空を踏んで山上ケ獄の方へ飛び去る。行者はこれを拜して即ちそれを等身に刻んで本尊とする、二丈六尺あり、次に十五童子が出でゝ行者をまもる、後にこのうち七童子を金剛山に置いて八童子を山上ケ岳に置く、また本尊の脇士として左に觀世音、右に彌勒菩薩の二佛を刻む。それから行者は天の川に行く、この水上は山上ケ獄で洞川の北を流れて十津川に入る。こゝに於て一千日のあひだ修行して大峰の嶮路を開かんことを祈る。岩中に琵琶の妙音が聞えるをもつて琵琶山と號して後に白飯寺といふ。次に山上ケ獄へおもむく、この山は吉野山より南方にあたつて山路すこぶる嶮

岨である、小天井、大天井から鞍掛へと進む。巖窟があつて大斧を持つた二つの鬼が鬼出して前後から道を妨げて『何用あつて來たか』と威だけ高にとがめる。行者『道の妨げをする奴は誰か』二鬼『吾はこの山に住んで人肉を食つて悦ぶもの、汝この斧の下に命を捨てゝ吾腹を肥せ』と打つてかゝる。行者は錫杖をもつて斧を打落して逃げる鬼共を捕へて足下に踏みつけ『汝等を生け置けば後世まで登山の妨げなり、打殺すべき者なれども今から心を改めて吾が咒にしたがへば許してやる、願ふことがあつたら申せ』と、二鬼は苦しい聲で『私共は麓の里に住める者なるが種々の惡業が重つて里に住むことかなはず、この山にかくれて獸を食つて命をつなぐ、いま一命をたすけたまへば行者を守護して永く靈場の守となつて後世まで修驗道を妨げる者があれば斧をもつて頭を微塵にくだきませう』と言ふ、行者はその誓言によつて二鬼をゆるして前後に從へる、これを善鬼後鬼といふ。さて前鬼後鬼が斧をもつて先に立ち、行者は義覺

義玄を連れて嶮路をふんで山上ケ獄にのぼる。高さ十丈にそびへる岩あつて後世これを鐘懸岩といふところ、それから西の覗き岩をすぎて巍峩たる岩上に草庵をむすんで藏王權現の木像を安置する。また山頂に到つて藏王權現を安置して、猶もすゝんで御嶽神山に行き、九つの峯を越えて王置權現山まで至つて各峰々に行場を開く。御嶽神山にのぼつた時に一體の骸骨があつてそのたけ九尺五寸ばかりにして左の手に獨股杵をとつて右手に利劍を持つて仰臥する、行者が獨股杵と劍とを取らうとすると山が動いてもそれは取れない、大に怪しんでこの山頂にとゞまつて本尊に祈る。夢中に告げあつて『汝は七生の前から當山で修行し、第三生まで岩窟を開き、すなはち三重の岩窟がある、いま見る骸骨は汝第三世の古骨なり、その劍杵を取らうと思ふならば千手陀羅を誦ずることに一千遍せよ』と、即ちその如くして八角九尺の劍を得て降魔の利劍と稱して身に帶す。

行者は金峰山はより山上ケ嶽、玉置まで嶮岨の山路を開き、また金峰山から金剛山へ往來の石橋を架ることをもくろみ、鬼神天狗の類を驅使しろと前鬼後鬼に命ずる。そこで彼等はこれを諸國の靈場數十ケ所の高山名山に觸れて諸天狗を金峰山に集める、集まるもの無量百千萬である。前鬼後鬼は行者の命を蒙つて是等の鬼神天狗をくばつて諸方の石を集める。此時に一言主之神が前鬼後鬼に『晝の働きはやめて夜毎に出て造れ』といふ。彼等はかしこまつて夜間に架橋工事をなすことゝして工事が行者が思つてゐるほど進まないので『急げ』と命ずる、彼等『私共は粉骨碎身して働いてゐますが、一言主之神が晝間は働くなと申しますので……、どうぞ一言主之神に仰せください』とのことに、行者は一言主之神に面會して『何故なるか』と詰問する、一言主之神『白晝を禁ずるのは石橋をきらふにあらず、わが面貌が醜いためであるから、行者よ、決して怨みたまふな』と答へる。

こゝに韓國廣足といふ者あつて役行者がまだ茅原郷にゐたころ行者の繁昌の有樣を見て自分も行者のやうに人の尊敬を受けて金銀財寶を得ようとて茅原郷に行つて行者に拜閲し『私も佛門に入つて呪術をさづかりたし』と乞ふ。行者は廣足の心中を知つたけれど『おこたらず勉强したがよからう』と優婆塞の行を傳へる。廣足はその戒をたもつて修行すること三百日に及んだけれども少しも驗が見えないので秘文秘印を傳へられないためだと行者を怨んで『なぜ呪術を敎へて下さらぬか』と問ふ、行者『汝は肉食を禁じ、婦女に近寄らず、不淨の家に行かず、優婆塞の行に似てゐるけれど心に戒をたもたず、衆生を救ふ心でなくて我が立身をねがふ、これ邪佞の心である、呪術を傳へてもその驗をあらはすことができない、呪驗をあらはして諸人をたすけようと思ふなら心に深く優婆塞の行ひをせよ』と言ふ。廣足はこれを深く怒つて直に茅原郷を退いて行者を誹謗して種々の妨げをするけれども彼の言葉を信ずる者がない。ところが

今度行者が石橋の工事をやることを知つて時機到來と思つて『役行者は深山魔所の幽谷にこもつて不思議な邪法を熟練して通力自在にして飛行の身となり、鬼神を驅使して諸國の天狗を集めて葛城の峰にこもつて、天位を傾けて神國を魔界にしようと企てる、速に征伐しなければ天下の亂となりませう』と奏聞する。諸卿は驚いて兎に角その實否をただして見ようと相談一決して『汝は葛城に行つて小角を連れて來い』と命ずる。廣足は直に兵五十人を引連れて葛城山に登つて勅命の御使であると威を振つてたづねるけれども行者の在所がわからぬので東西南北の峰々谷々を探しまはつて遂に主從五十人が進退きはまつて糧もつきて餓死するばかりになる。そのうちに山中鳴動して天地晦暝となつて空中に聲があり『いかに廣足、汝が舌頭を振つて罪なき行者を讒言して主上を迷したてまつり使勅と號して當山に來るとも行者は神通自在にして飛び去つて今は箕面山にある、廣足ごとき凡夫の及ぶことでない、いまに思ひ知らせるぞ』

といふ。廣足『役小角が謀叛の企でをなすこと叡聞に達してその罪を糺明せんとの勅使なり、惡鬼外道の知ることにあらず』と言ふもおはらず、數千の惡鬼が虛空にあらはれ、烈風が吹きおこつて石を飛ばして大木を倒す。廣足をはじめ從者の面々は岩角にしがみついても力およばず幽谷に吹きとばされる。彼は命からゞゝで逃げ歸つて報告して曰く『役小角は邪法を行つて飛行自在の身となり、諸の眷屬や惡鬼外道を率ゐて虛空を踏んで葛城の峰をとび去つて姿をかくす、これ違勅の罪のがるゝところなし、早く嫩葉のうちに斷せずんば斧を用ゆるとも難かるべし』と。これによつて諸卿は八方へ兵をくばつて尋ねること五十日に及ぶけれどもその在所がわからぬ。箕面山にあるとの報に廣足をして追捕せしめる命を發し、廣足は百人の兵を選んで箕面山へ急ぎて瀧の上に攀ぢのぼり、行者が石上に座してゐるのを見て『汝は葛城の峰に鬼神を集めて神國を魔界になして天位を奪はんと企てるよし叡聞に達し、こゝに於てその罪を糺

明のため宮中に召すべき旨の勅命を下さる、則ち勅使が葛城に登山すれば汝は邪法を行つて當山に飛來して隱る、帝は逆鱗ましまして急ぎ追捕すべしとの嚴命を蒙つて廣足まかり向ふ、召捕つて刑罰を正しうせん』と兵に下知すれば、兵士は行者の前後左右より立ちかゝらうとする。行者は少しも動かず、廣足に『われ葛城にあつて謀叛の企て更におぼえなし、また當山はわが開きし靈場なれば此所にあつて疑ひを蒙むるいはれなし』と、廣足『汝は謀叛の企ておぼえなしと雖も、かく言ふは廣足の言葉に非ず、みな勅命である、背かば違勅の罪のがれがたし』行者『吾は仙家に入つて幽冥の者と同じ、なんぞ違勅の罪を蒙らんや』廣足『仙家に入るとも王土にあつては違勅の罪のがれ難し、未練の應對をやめて速に罪に伏せ』と、行者は身をひるがへして前に立てゝある錫杖の上に座す、廣足『杖下もまた王土にあらずや』と、行者は錫杖を取去つて空中に座して『勅命をそむくに非ず、しかれども汝が手にとらはれるいはれなし』

と虛空を踏んで飛去る。廣足は天を仰いで暫く茫然たる後、仕方なく山を下ること半ばに瀧の底から黑龍があらはれて烈風をまきおこして彼を追ふ。

廣足は別に一計を案じて勅許を得て茅原郷に行き、行者の母のところに至つて『小角謀叛を企てること露顯に及び、追手を差しむけらるゝと雖も飛去つて影を隱す、よつて母を召捕つて行者の行方を糺明すべしとの勅命なり』と言つて兵卒をして立ちかゝらしめて行者の母を籠輿にのせて都に還つて奏聞に及ぶ。彼女は糺問に對して『小角は吾子なれども年三十二歳にして家を捨て葛城の峰に入つてより此方もう三十五年に及べども一度も家に歸つたことなく、今に戀慕やみがたく遺像を吾子と思つて明け暮れ愛し、まことの小角は死生のほども知らず候』と答へる。彼女は八十四歳、廣足のため法例によつて七十餘度の呵責に逢つて悶絶すること數度に及び、遂には獄屋につながれ監禁さる。行者はこれを遙に見て箕面山より虛空を走つて宮中に入り『役優婆塞の行者小角參內

す』と呼ばはる、諸郷一統はその神通に恐れ且つ感じ入る。行者『身に罪なけれども母を救はんために來る、願くば吾身に刑を蒙らん、母をゆるしたまへ』といふに、その孝心を奏聞におよびて『小角の母を茅原郷へ歸して小角を豆州大島へと配流すべし』との勅命をくだす。行者『謀叛の企て更になし、葛城の峰にあつて幽冥の者と驅使するは謀叛にあらず、金剛山と金峰山との間に石橋を架けて後世に到つて參詣の苦をたすけんためなり』と辯明すれど遠流の沙汰を取消すことならず、六十六歳、文武天皇三年二月伊豆の大島に流さる。

行者の母は茅原郷に歸つた後に行者が大島に流されたことを聞いて悲歎のあまり遂に重い病に臥するやうになつたので、行者は夜になると飛行して來て母の看病をし、朝になると大島に歸つた。廣足はこの事を知つて參内してそれを惡謀あるものゝごとく讒して奏聞におよべば、帝大に逆鱗あつて小角誅戮の勅を下す。追討の兵が大島に行つて行者に『遠流の制禁を破つて自在に飛行して

惡計を企てるよし叡聞に達す、これによつて殺刀を下さる』といふ、行者『惡計を企てるに非ず、富士の高峰にのぼつては天下太平を祈り、また母の病あるを知つて茅原郷に行くこと遠流の制禁を破るに似たれども曾て破らず、夕べに行つて朝に歸つて晝は島にあり、これ制禁をまもるゆえである、しかるに讒を信じて糺明もなくて死をたまふこと仁慈に洩る、されど天命なんぞ辭することを得ん』と速に座して頭をのべて殺刀を待つ。太刀取りのもの下知にしたがつて行者の後方に立つて既に太刀を擧げようとすると忽ち眼がくらんで顚倒するに、勅使が代つて太刀をとると同じく眼くらみて尻居に臥す、誰が代つても同じことであつてどうしても殺すことができないので、不思議に思つてこの事を歸洛して奏聞する。勅使が大島へ行つてゐる間に廣足は病んで苦悶して死ぬ。帝は御心をなやまして博士に命じて占はす、その卜占に曰く『天皇よろしく役行者をつゝしみ崇めたまふべし、これ凡人にあらず大聖人なり、速にゆるして

都に迎へ、尊重供養して心にまかせさせたまふべし』と、これによつて小角が謀叛を企てたのは誠か或は廣足の讒言か決しがたくて諸卿評議の結果、母を宮中に召した後に小角をゆるし、もし小角が惡謀を企てることあれば其時に母をきびしく責めて小角をこらしめることになり、行者の母を召寄せ、先づ小角の父が誰であるかを問ふ。母こたへて曰く『憚ることあつて愼しみをりましたが勅問とあつては恐れながら申上ます、若かりし彌生なかばのこと、舒明天皇が茅原鄕に行幸したまひて鷹を放つて御遊ありしが、俄に雨降り出しければ妾が舘に入御あつて湯を召したまふと仰せども父は無位無官の身として玉座ちかくは參ることを恐れ、妾をして湯をたてまつる、妾は拙けれども御心にかないしにやその時にたゞ一度の恩幸を蒙りしにすぎざれど、それより常ならぬ身とはなりはべる、御胤なりと披露せんことの恐れあるゆえ天より獨股杵の下りしと僞つて月滿ちて男子を產む、たゞしき天子の御落胤なども賤の女の胎にやどり

たまひて匹夫の中に入りたまふことのいと悲しくてありけれども、君の御名をけがしたてまつることの恐れ多く、この六十九年のそのあひだ口外いたせしことなく、今日勅命のおたづね辭することかなはず』云々と奏したてまつる。文武天皇は容易ならざることなりと叡慮をめぐらしたまふに、博士の勘文に大聖人とあつたのはこの故なるか、されば廣足の讒言であつたのかと行者に對する御疑ひ晴れ、行者の老母を茅原鄕に歸して速に小角を召し返す。文武天皇は行者の神通自在なるを叡感あさからず、參內をゆるしたまはつたれど行者は堅くそれを辭して茅原鄕に歸つて母に仕へる。朝廷からは再三參內あるべき勅使をつかはすによつて、行者は母を連れて箕面山に隱れる。勅使は箕面山にまで行く、行者はこれを知つて入唐することを發心してまづ德善大王の社前に入唐の旨を申せば大王も別離を惜しみて社內から猛火が燃え出る。行者は草座にあつて母公を鉢に座せしめて大唐國へ飛去る。其後といへども每年日本に往來して

三つの峰にて謀行するといふ。

日本一休禪師

（一）

一休十一歳の時、師の坊が他行して留守のところへ餘所から餅が來たので少しく割つて師の坊が歸るのを待つて取出す、師『滿月無片、破缺はどこにあるか』一休『雲隱有是』と答へて一片を出して見せる、師は笑つて『こざかしき小僧かな』と。

一休十二歳の時、門前の小溝で中ぬき大根を洗つてゐるところへ雲水の僧が大德寺に止宿しようとて來かゝつて『小僧、大根を洗ふか』といふ、一休やにはに中ぬき大根をふり上げて『なに出家をつかまへて小僧と言ひ、小根を見て大根と言ふは如何に』と打つてかゝる。雲水、ぼう〳〵の態で鷹ヶ峰をさして逃ぐ。

一休十七歳の時、下加茂を通る途中に死人がある、その家に入つて引導をさづける、或人『馬鹿な小僧だ、死人にむかつて何を言つたつて聞えるものか』

一休『芭蕉無耳、雷之音聞則自出』と、芭蕉は雷鳴を聞いて春芽を出すと世に傳ふ。

師の坊に參學する一人の旦那、或時皮袴をはいて來る、一休小僧これをちらりと見て直に門前に「此門の内へかはのたぐひかたくきんせいなり、もし皮の物入るときは其身にかならずばちあたるべし」との札を出す。旦那『この寺の太鼓は何んとする』一休『だから夜晝三度づゝばちをあてる、そなたにも太鼓のばちあてようか、皮の袴をはいてゐるから』と、その旦那こんどは師の坊を齊に招き、一休小僧もお供して來るものと見て門前の橋に「此はしをわたることかたくきんせいなり」と書いて高札を出す、師の坊『この橋をわたらないでは入る道がない、一休どうしよう』一休『いや、まん中をお渡りなされ、端しをわたらなければよろしうござる』と二人は橋のまん中を渡る。旦那こんどは齊の膳に一休の分には魚類をつける、一休それをみんな食ふ、旦那『法衣を着

たる僧が魚をしたゝか食ふは如何に』一休『口は鎌倉街道だから貴きも行き、賤しきも過ぐ』旦那『こんなものも通る』と刀をすらりと拔いて突きつける、一休『敵か味方か』旦那『敵だ』一休『そんなら通すことならぬ』旦那『いや味方だ』一休『曲者が通るとていま俄に關がすはつた』

或人『如何に小僧、それ地獄極樂があるか』一休小僧『人が惡事をすれば死んで三途の河や死出の山などの難所を越して地獄に入る、極樂はこれから十萬億土にある』或人『そんなら私のやうな足弱の者は極樂へも地獄へも行くことができない、どうしたものだ』一休『地獄も極樂もこゝを去ること遠からず』或人『いやいや眼前にあらはれて見えなければ合點まゐらず』一休『では見せてやる』と繩をもつて彼人の首をしめる、或人『苦しや』一休『これ地獄』と繩をとく、或人『やれ〳〵嬉しや』一休『これ極樂』

或人『一休と名づけたお心は如何に』一休『有漏路より無漏路へかへる一休

あめふらばふれ風ふかばふけ』或人『有漏無漏とは何んですか』一休拂子をとつて彼人の顔を撫でゝ『どうぢや』或人『驚くばかりで何とも申さうやうはござらぬ』一休『はつて驚いたところが有漏路、何とも心得ぬところが無漏路』彼人『私も一首よみますぞ、うろぢむろぢ一休ぞと聞くときは十萬億土すん先きと知る』一休『善哉々々、支那に四休居士といふ人があつて、その心を詩にして、廉茶淡飯飽即休、補破遮寒暖即休、三平二滿過即休、不貪不妬老即休』或人『三平二滿とは』一休『そなたの御内儀さ』或人『合點ゆかず、醜いといふことですか』一休『おとごせのことさ、三平は頬と鼻、二滿は額と顎ぢや』或人『さて〳〵面白いことだ、さりながら女共に聞かせたら一休樣を抓り申しませうぞ』

糸屋由右衛門といふ人、途中にて一休に出逢つて『さて〳〵一段のところでお目にかゝりますものかな、ついでながら明日は少し志す日にさしあたります

から御坊さまへお齋を進じたうございます』一休『心得た、宿所はどちらか』糸屋『室町通そんじよそしらでございます』一休は翌日たづね行く、店に小さい鉈をかけて置く、こなたといふ事だらうと判じて家に入る、座敷の入口に犬の革を敷いてある。一休を見て亭主『さては今日は折ふし路次あしく御大儀の御事でございました。御足はよごれませんか、洗足を』一休『いや〳〵たゞいま川(革)を越えてまゐつたから少しも差支へない』と出られ、亭主さてこそ最早一ぱい食はされたと思ひ、御膳を出す。一休が蓋をとつて見ればどれも小鰊を一ぱい入れてある、一休『さてと今日の御志は三七日であつたか』亭主は錢百文を出して『これは今日のお布施にまゐらせます、これへ寄らずにお受けください』一休『心得た、このまゝに受け申す、投げずに此處へよこせ』

一休が川端をとほると女が裸になつてゐるのを見て陰部を三度禮拜して過ぎる、往來の人これを知つて『おや〳〵あの坊主は氣違か、出家の身として女の

裸を拜んで行つた』と噂し合ひ追ひかけて『坊さん、女の裸を拜んだのはどういふわけかね』一休一首をよんで『女をば法(のり)の御くらといふぞげに釋迦も達磨もひよい〳〵と生む』

堀川邊に道意といふ者あり、一休に齋をすゝめて『和尚さま、私は娘一人を持つてゐますが、この春隣町へ緣づけましたに姑と仲惡しくて歸つて來てゐます、どうか何か說き聞かせて姑と仲よくなるやうにさせたいものですが、お敎へをねがひます』一休『私が關東へ行つた時の話だが、姑が長いあひだ病んでゐるので其子が醫師を呼んでもその効がない、醫師がいふには豚の膽を煮てくはせれば本腹するとのことで、妻に豚の膽をわたしてこれを母に煮て差上げろと言ひつけて他出した、妻は自分の娘が子を產んだのでその胞衣を煮て姑にすゝめ、豚の膽は隱して自分の藥にした、すると赤色の蛇が彼女の口へ飛入る、尾四五寸ほど口から外へ殘る、彼女は泣き叫んでもだえる、奇代のことゝて見

物人が押しかけて來る、老人が見る時は尾を動かす、若者が見る時は尾を振つて女の顏を叩きつける、或人が釘拔で蛇を挾んで引拔かうとしたが、尾の堅いこと鐵のごとく奥へ入つても口へは出ない、かくのごとく苦しむこと三日で死んでしまつた』との話、道意夫婦は恐しいことだと感じ入る、道意『和尚さま、近頃あたらしい枕屏風をこしらへました、これは娘の方へ送りたいと思ひます、何か一筆おねがひいたします』一休は筆をとつて「萬一人事一口むやく總じて壁に耳岩に口姑夫たゞ主親とあふぐのみ、我男げにたいせつにおもひなば、などしうとめの見にくかるべき、むねの火のもえたつときの有るならばこゝろの水をせきとめてけせ」

早川治郎太夫といふ者が一休に『人を殺すにその理あれば千萬人を殺すもくるしかるまじ、また殺す理なければ一人たりとも惡逆無道でありませうか』一休『殺生はもろもろの罪の本である、たとひ生ずるものは蚤虱でも殺してはな

らぬ』治郎太夫『或は主命と申し、または朋輩にたのまれたら是非なく殺すことあり、その時は頼んだ者がとがを受けても私には何の罪もありますまい』一休『あの柳に雪がつもつて枝が重さうである、拂つてくれぬか』治郎太夫が振り落すと雪が彼の頭から降りかゝる、一休『私がたのんだのだから雪は私に降りかゝりさうなものが、お前に降りかゝつたのはどうしたわけか』

木屋平次郎といふ者『一休さま、私はこのやうに小男で色は眞黑、人の笑ひものになつてゐます、どうした因果なことでございませう』一休『生れつきだから仕方がない、黄金は小さくとも天下の寶となる、針は細いけれど着物を縫ふ寶となる、墨は黑いけれど佛經、祖祿、聖經、賢傳の書をしるす、漆は黑いけれど諸道具をたすける、山は高しといへども貴からず樹あるをもつて尊しとす、霜雪は白いけれども萬民はいやがる、たとひ肥えふとつた人がいかに痩せほそりたくとも駄目である。さるところに才覺利發の人あり、この男は非常に

背がちんちくりんで怨めしく悔み悲しみ、あまりの無念さにつくづくと思案し、我子だけでも背を高くしたいと考へて、無雙の惡女だけれども身のたけ六尺に餘るのがゐたからそれを妻とした、子供の産れたのを見れば女である、どうか男がほしいと思つたが、次に産れるのも女だ、この多くの娘共が成人するとみんな母親と同じく背の高さは六尺以上だけれど二目と見られぬ惡女なので嫁にもらひ手がなかつた』

或人が一休を訪ひ『私は文盲で六かしいことはわかりませんから、何か面白いお話を聞かしてください』一休『もろこしに虎に追ひつめられて食はれようとする狐が、いかに虎よ、よく聞け、必ず吾を食ふこと勿れ、今日より吾を獸の大將とすることを天道から仰せつかつた、故に吾を食する汝は天命にそむいて忽ち命が滅すべし、この事もし偽りと思ふならば吾の後について來るべし、もろもろの獸は吾を見て必ず恐れて逃げ隱れるだらうと、虎は不思議に思ひな

がらも狐の後について行くと、なるほど獣といふ獣はみんな逃げ隠れるので虎は狐を信じてそれに仕へた、世間にはかういふ狐が多いから御用慎々々々』

一休は蛸が好物なので或日使の僧に蛸を買ひにやらせたが、歸りが遅いので一首「このたびは急ぐといふに長袖のたこの入道みちのおそさよ」かくて蛸四五はいを買つて來たので一休は引導の頌を作り「千手觀音蛸手多、斬懸柚酢拜如何、佐州一味天然別、他禁戒任老釋迦」と柚酢をかけて喰ふ。それから檀へ行つて酒を呑んだが、蛸を食ひすぎたので吐いてしまつた。旦那衆これを見て『一休和尚は生佛と思つたに蛸をまゐられたな、さては生臭坊主であつたか』一休『いやいや私は蛸なんか口の中へ入れはしない、蛸が私の口から出たのだよ』旦那衆『口から吐き出した物を食はぬと言はれるか、いよいよ聞えぬ坊主だ』一休『あの百萬遍の善導法然の畫傳を見ろ、善導は決して阿陀彌佛を食つたことがないけれども、あのとほりに口から三尊が出てゐるではないか、善道

大師さへ食はぬものが口から出るのを制することができない、ましてや愚僧は食はぬ蛸を出したとて不思議がることもあるまい。

（二）

一休和尚は生佛で魚を食つて水中に吐き出すと元のやうに生きかへるとの噂が京都中に言ひ傳へられた。そこで一休は辻々に高札を立て『來る××日の日ざかり松のほとり紫野において魚を喰つてそのまゝ元の魚に吐き出し水中におどらさしむる事なり、御望みのかたがた御見物に御出で待ちたてまつる、太夫は天下老和尚一休大禪師』とかゝげる。其時になると多勢が押かけて來た。大盥に水を入れて傍には魚の料理が御膳にのせてある、一休は先づその魚をうまさうに食つて、それから大盥にむかつて「げえげえ」と吐き出さうとすれど少しも出て來ない、一休『さて各々方、はるばるの御出によつて、いつもより一

きは上手に吐き出さうと勉強するけれどもなかなか出て來ない、是非もないから棄になりともひり出して捨て申さう』と言ひ捨てゝ寺内に入つてしまふ。

一休が若いころ一大事因縁の工夫をしてゐる時に諸旦那、智音衆が毎日とやつて來るので、妨げとなるため、病氣とあつて面會を謝絶して奥に引籠る。人人心もとなく折々見舞に行けば長髪ぼうゝとはやし、顔色もすぐれぬ樣子、醫師をつかはして見させるに脈は平脈なので不審の病氣と醫師も首をひねる。人々首を集めて『これは疾病ではない、若い御僧のことであるからもしや戀などをなされたのではなからうか、これは秘藏に仕の好い知音だけ二三人でそうとお伺ひして見ようではないか』とひそかに三人が見舞に行つて四方山の物語がすんでから一人が申出るやう『此間さま〴〵の御療治にても御脈は常にかはらずと醫師おの〳〵申します、平生とはちがつて何とて心深くわたらせたまふか、此日ごろ戀わびて偖かくの如くにやつれはてゝゐられるのではござりませ

ぬか』一休『ようこそ仰せられた、何とやら私には不似合のことであるが、各方は日頃のよしみ、ひとへに沙汰なくかなへてくだされ、さりながら心がみだれて恥かしい、それと名を面上では述べられない、一筆かくほどに門外へ出てから開いて御覽くだされ、いそぎかなへてくださらば私の命はながらへて各各方へはそのかはりよい道を教へ申しませう』と奥の間に入つて一筆さらりと書いて引むすびて三人にわたす。三人は『お心やすく思召せ』と門外へ走り出て『さてこそ言はぬことか』といそいでその女の名を知らうと開いて見れば歌「本來の面目坊が立姿ひとめ見しより戀とこそなれ。われのみか釋迦も達摩も阿羅漢もこの君ゆえに身をやつしけり」とある。

嵯峨に了意坊といふ道心あり、いつの頃からか首に蛇がまきついて放れない、さま〴〵のことをして漸く放してもまた夜の間にまきつく、日々に嵯峨から京へ鉢乞ひに行く時は蛇を隱すために滴檀を首にかけて見えぬやうにしてゐる。

彼は困りはてた結果、そのころ二尊院にゐた一休のもとに行つてその由を語つて力を借りる、一休『いかさま、それは女の執着だらう、汝はこれから高野山へ上つたがよからう、さもなければ退くことはあるまい』と、了意はよろこんで高野山へのぼると不動坂から蛇は逃げ失せてしまつた。二三年の後に嵯峨へ歸つて來たのでまた夜の間に蛇がまきついた。

土佐守に一幅の揮毫をたのんだけれどなかなか描いてくれないので催促に行くと、土佐は晝寢してゐる、ひきずり起して迫る、土佐は眠いので『今夜は寢ずに描いてやるよ』と言へども或人『いや〳〵また言へば明日となる、せひ今のうちに』と承知せず、土佐も仕方なく筆をとつてぐる〳〵とまはし、刷毛をもつてさつと書き『これでよからう』とまた寢る。其人これでよし〳〵と歸つて繪をひねりまはして見るも何の繪かさつぱりわからぬので取つて返し『これは何んですか』土佐『私も知らないよ』とのことに引破らうかと思つたが、い

や待てと一休から贊をしてもらつたら何か値打が出るだらうと考へて『土佐守から描いてもらひましたが、更にこの水中の物がわかりません、師の坊はどう思召すか』と示す。一休『ふうん、何とも見えないが、贊ならしてやらう』とて筆をとつて「水中に物あり、その一物を問へば書きし畫工もしらず、持ぬしもしらず、贊する我は猶しらず」

或寺に五百羅漢を作つて堂供養をする、貴賤群衆の見物がある、群衆の一人が傍の僧に『この五百羅漢に一々名がござりませう、御僧はさだめて御存じであらう、お聞かせくだされ』と、僧は何とも答へることができず方丈の方へ逃げて入る、一休が來たので彼は一休をとらへて同じく問ふ、一休『わけはない、一々問へば一々答へてあげる』その人『これは』一休『釋迦牟尼』その人『これは』一休『阿難』その人『これは』一休『南無さんたんど』その人『これは』一休『すきやとや』その人『これは』一休『お

らこちだ』とだんだんと問ひ、だんだんと答へて百二百とすゝむ。その人『さてさて和尚さまは御覺えのよいこや』一休『左樣、何でも經文一卷あれば何千何萬でもお答へでき申す』

或人が一休を訪ふて雀一羽を手に握り『いかに和尚、この雀は生か死か』一休『空』その男だまつて逃げさる、一休こんどは其男を訪ふて敷居を踏みまたいで『亭主々々、一休は出るか入るか』その男こたへ得ず、手を打つて笑ふ。

一休が桂川をわたる時に川中に倒れて流れる、折ふし川端に人が多くゐて只これはこれはと言ふのみで助けようといふ者なし。一休ようよう川杭につかまつて這ひ上る。人々『さてさて御坊は運がよかつた、どうして上ることができましたか』一休『されば川に落ちたから上つたので、上つたから生きたので、別に珍しいことでもなかろ』

山里の或者の妻が他の男と情を通じて良人が邪魔になり、情夫と相談して良

人に酒をしたゝか呑ませて醉ひ伏すを見て密夫密婦が合力して良人の頭に針を刺しこみて殺し、家に火をつけて燒殺したる態となして、女は死んだ良人の死骸に取りついて大聲あげて歎き悲しんで泣いて村の人々を欺く、折りしも一休が通りかゝつて女の泣き聲を聞いて『この女の泣聲は物恐れしてゐる調子であつて、少しも悲しみの聲ではない』と村の人々に言つて過ぎる。女の巧みが破覺した時に村の人々『聲を聞いたばかりでそれぞと明したまふは必ず弘法大師さまであらう』

一休が黑谷へ參詣した時に當山の僧は、一休を吾物にして日蓮宗に見せようと、善道、法然の畫像に贄を乞ふ、一休こゝろよく受けて善導大師には「末法出現名善導、則是彌陀化身也、濁世末代導惡人、一切衆生易往生」と法然上人には「傳聞法然活如來、安座蓮華上品臺、尼入道同愚痴輩、一枚起請最奇哉」と淨土宗の僧等は大に悅んでこれを日蓮宗の僧等に示して誇る。日蓮宗の僧等

はこんど祖師日蓮の畫像を大急ぎに描かせて一休に賛を乞ふ。一休たゞちに引受け「傳聞日蓮活如來、香座則是妙法臺、尼入道同愚痴輩、一遍題目殊勝哉」と書いてその次に「ぼうずぼうず小坊主まめの粉にぬりぼうず」と。永觀堂の住職この事を聞いて自分の寺にある半金色(下半身の黄金色)の善導大師の畫像の賛をたのむ、よし〳〵と賛して曰く「くろからんころもの裾の黄になるは善導大師はこうをたるらむ」

七條ほとりに有德の町人あつて一休を招いた時に『いづれをさして善とし、いづれをさして惡とするか』一休『善惡かぎりなし、たゞ善惡を知らうとならばその善し惡しをなす源にある、彼に行つてお尋ねあれ』と、一休が歸らうとするに雨が降つて來たから亭主『しばらく待つて雨をおはらしなされ』一休は直に一首『ふらば降れふらずば降らず降らずとも濡れてゆくべき袖ならばこそ』

或人は一休に『人間は死んで體がなくなつても魂はとゞまると申すが、佛になれば淨土で樂しみが多く、地獄へ行けば鬼に呵責されて隙がない、とても娑婆へは來られさうもないと思ひますが』一休『されば私もその儀は知らず、若い頃に談義など聞いたことがあるが、誠か嘘か知らねど、佛とも鬼ともなるさうだ。そのくせ閻魔王とやらの前にて公事奉行の手にわたつて娑婆にて作つた罪を鐵か銅かの帳面につけて置いて鬼に見せて、まづこれほどの罪人だから急いで呵責せよといふに、いろいろの鬼どもがさま〴〵の責めにあはせるよし、さりながら毒藥變じて藥となるといふことあれば、さのみ罪の多いを歎くにも及ぶまい。作りおく罪が須彌ほどあるならば閻魔の帳につけどころなし、であらう。釋迦一代の藏經はみんな人間をかためるためだ、あら面憎くの釋迦殿だ、いろいろの嘘をつき、それはと問へば一字も言はぬと言ひ、又さうかと思へば、一佛淨土くわんけん法界、草木國土悉皆成佛と言ひ、あちこちと身拔けばかり言つて、人間は永代さまよひの身に近うしてありと思へばまた謠ふも舞ふも法の